松屋外集 八

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

松屋外集巻之八

目録

第一紫微三台考
三公 太政大臣 左大臣 右大臣
内大臣 公字の義 三孤 九卿
三槐 内朝 外朝 九棘 槐門
任槐 丞相 左右丞相 萬石
二千石 三司 儀同三司 吏部侍郎
式部 侍中 大内裏 紫微宮
清涼殿 殿上 藏人 天象 地球

大正
9.1.25
謄写

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

風海潮　地震　津波　度數
里數　九曜天　常靜天　十一天
三十三天　南極　北極　同行旋行
赤道　黃道　五帶　夜人國　氷海
春分　秋分　夏至　冬至
天の蒼色　六大洲　四大海　晝夜
紫微垣　大微垣　天市垣
羅甘八宿　北辰　帝星
太子庶子後宮星　三公星　三台星
宸居ニ号ス紫微ト

第二かうぢ〳〵
第三鼈ゐき間の貂はらう
貂　貂裘（テキノカハギヌ）

第四うへ〳〵の鷲
鷲の山　鷲頭（ジュトウ）　鷲峰（ジュホウ）
耆闍崛山（ギシャクツセン）　姞栗陀羅（キリダラ）
廣普山（クワウフセン）　白堵山（ビヤクゼンセン）
猴連山（コウジヤウ）　普賢山（フゲン）
鷲臺（ジュダイ）
矩吒山（クダセン）

第五鉄輪（カナワ）
七徳（シチトク）

第六鞆繪

繪鞆巴の字　巴文　葵の御紋

鞆　褒武多

第七眉間尺

一頭二ツ頭三ツ巴の紋

第八多磨河

六玉川　玉の横山　鵐の里

多西多東　阿唐川　阿豆佐味神社

第九參議公の辨

拵物　除目召名

松屋外集巻之八

武藏多西　平小山田與清稿

越後高田　平渋谷永保訂

第一葉微三台考

○職原抄云三公者象天三台星也三槐者周世外朝植三槐三公班列其下槐者懐也懐遠人之義

三公は太政大臣左大臣右大臣をいふる称

内大臣を加てハ四公なれば令義解に太政大臣内大臣准后親房卿の説なり職原抄

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

百寮北辛万民乃表ヲ又少師少傅少保の
三孤を置て三公乃副と
特に公卿の間ゟ在て特立せ令給ふ之
漢書ノ賈誼が傳ニ荀ハ者成王ヲ幼ク在リ繈抱ノ之中ニ召公
為ニ太保ニ周公為ニ太傅ニ太公為ニ太師ニ保ニ奭ノ身體
傳ハ傅ノ之ヲ徳義ニ師ハ導ク教訓ノ此三公之職也於レ是為ニ
置ニ少傅ニ少保ニ皆上ニ大夫ノ之也曰ノ少保少傅少師是レ与ニ太
子ニ宴者ノ之也故ニ孫卿提ヲ有ニ識三公三ニ少固ニ明ニ孝仁
礼義ニ以道ニ習ノ之ヲ逐ニ去ス邪ク人ヲ不レ使レ見ニ悪行ヲ去ク注
ニは師古曰ノ保ハ安ノ之也傅ハ輔ノ之也道讀曰ノ導ト之ク師古
曰ノ宴謂ニ安居ニ之ク師古曰ノ狹小児ノ之也提ハ謂ノ提撕スルヲ
之ヲ
とゝめ又冢宰司徒宗伯司馬司寇司空此六
卿を置三孤と合せて九卿と称ス公羊傳高
礼ノ注疏礼記疏六典通典藝文類聚通考事
物紀原小学絳珠史記平津英主父傳續管窺

輯要路門乃内ゟ内朝あり外ゟ外朝あり
朝北方ゟ九本社棘ノ木ヲ
ゝ群士ゟ其後ゟ居ル面ゟ三
侯伯子男ゟ卿ゟ位ゝ群吏其後ゟ居ル面ゟ三
本の槐ノ木ヲ三公ゟ
後ゟ居ル棘ノ木ヲ列長官庶其
あゐゟ象ゟ槐ノ木ヲ和名エニズ字懐ゟ通ヘば
来人を懐ゐゟ象ゟ
槐門ともいひ古ゟゐ任ぜら槐なといふ
ゟ此義ゟ春秋元命苞ノ古微書ノ卷ノ文ヲ牧ノ
ゟ槐ノ聽ノ訟ノ事ヲ其ノ下ニ棘ゟ赤心有ノ

刺言、治二人情一者原二其心一不レ失二毎事一辣ハ訪レ以刺レ之
令下其情一各帰上レ之レ也情見レ焉レ也と已
或説ニ司馬司徒司空ヲ三公トイフハ韓詩分傳
秦漢ノ相國左右丞相ハ史記西漢ニ丞相ハ
孫弘ガ上書ニ致二三公一ヲ史記秦漢ノ
同相國左右丞相ヲ三公ト称ルヲ通典
通考哀帝ハ代師傅ヲ上公トシ大司馬ヲ上公トシ大司空ヲ三公ヲ
ム左ニ置後漢太傅ヲ上公トシ太尉司徒司空
ヲ三公トス漢ノ制三公ヲ萬石ト号ス萬石君
子兄弟ヲ二千石ト称ス
如キ称号ナリ〳〵刺史及諸侯相ヲ

二千石ト号ス其秩禄ハ漢書ヲ孝宣帝
称ス我共ニ治ル者ハ其良二千石乎ト
張敞傳ナドニテ知ルベシ二千石ハ郡守ヲ
いふ秦代ノ称号ナリ魏晋宋齊陳後魏北齊後周ノ代
或ハ置或ハ廢隋ニ至テ三師三公アリ唐ノ
制ニ古ヲ曰ヒ隋書舊唐書新唐書六典通典通考本朝孝徳
天皇元年以テ阿部内臣ヲ左大臣蘇我倉
山田石川麻呂臣ヲ右大臣トシ以テ大錦冠ヲ授ケ中臣
鎌子連ニ内臣ト孝徳紀ニ大化五年二月置ク八省百
官ノ上ニ同天智天皇八年十月遣東宮太皇弟ニ天武ニ於
筑紫ノ大宰ニ授ケ大織冠ヲ與ヘ大臣ノ位ニ天智紀ニ同

十年正月以大友皇子拝大政大臣以蘇我
兄臣為左大臣以中臣金連為右大臣同上
其の外記しるす所の如し拠ル孝徳元年阿部内麻
呂蘇我石川麻呂中臣鎌子を左右大臣内臣
となせるに比し三公其職ニ非ス天智十年大
友皇子蘇我赤兄中臣金が太政大臣左右大
臣となれるの時の如くにはあらず隋唐
乃制ニ據テ酌ニ斟セ之ヲ又三公を三
司となせるに似たり天智二年二月に太
宰権帥藤伊周列ニ大臣ニ在下大納言上ニ号ス儀

同三司ト栄花物語捷桑略記日本記略卧雲日件職原抄追加ト見エテ
三公ニ准ヘラレタルヨシ乃称之儀同三司ノ名目ヲ
漢官ニはあまねく見えたりとぞ後漢書鄧騭ガ傳ニ処
平元年拝ス二騭車騎将軍ニ儀同三司ニ始テ自リ騭也ト
あり後出而之次

又云吏部侍郎職ニ侍中著継初出ツ業徴宮ニ云ヽ是ヽ
位藏人為ニ式部丞ニ而叙爵ス時事也云ヽ

此文は職原抄ニ式部丞ニ叙ス条の注ニて後人の
ものぐさや倭漢朗詠慶賀部ニ吏部侍郎職ニ
侍中著継初出ツ業徴宮ニ讃ス在衡ヲ正通私註ニ賀ノ三

于式部少輔、補ス五位、藏人ニ之詩也唐官ニ曰ハ吏部ト式部ヒ也侍郎ハ少輔也侍中、藏人ヒ也著ハ緋ヲ者六位ハ青色ヲ五位著緋色ヲ紫微者北辰之所居也譬ニ帝居ヲ也按ニ卧雲日抄ニ桓武初テ都ニ于當國ニ而構フ大内裡一然ヒ全篇ノ則在リ嵯峨天皇ノ代ニ云ニ大内裡乃事山槐名勝志大内裡ノ條ニ引テ古書ドモヲ委ク記セリ見テ可シ知リ矣

藤原在衡ヵ式部權少輔ヲ五位藏人ヲ補スルヲ賀ス詩ヲ在衡ハ延長二年ヨリ従五位下同六年式部權少輔同年五位藏人ヲ経テ既ニ五位ニ〻ト淺緋ノ袍著ヲ聴サレバ其袍ノ色ヲ初テ染ル微宮ヲ也ト云ヘリ紫微宮ヲ天子燕

息ノ處清涼殿ヲ是類聚國史ニ記セリ又セイラウデン又セイリヤウデンヲ勅旨ノ家集ニモ多ク見ユ西洞院ノ滝殿ヨリ後光厳院時代ニ至ルマデ常ノ居所ト定ラレシヤウデンヲ也ト云ヘリ

式日本紀略ニ曰ク延暦廿四年八月廿五日ニ天皇ノ御在所ヲ清涼殿ヨリ遷シ給フ本殿ヲ

本殿 西宮記

後寝 改事要略ニ曰ク天皇ノ常ノ御在所ヲ後寝ト云ヒ中殿ヲ新儀式ニ曰ク天皇ノ常ノ御在所ヲ中殿ト云ヒ殿上ヲ古今集ノ序ニ曰ク殿上ノ侍臣ニ詔シテ和歌ヲ奉ラシム

中殿 拾芥抄ニ曰ク中殿ハ會部類記ニ曰ク中殿ハ内裏ノ正殿ナリ

路寝 李翰文粋ニ曰ク路寝ハ天子ノ正殿ヲ

御座夜御殿朝餉 拾芥抄ニ曰ク御座ハ江次第ニ曰ク御座ハ古今集ノ序ニ曰ク侍中群要ニ曰ク御座ハ清涼殿ノ中ニアリ夜御殿ハ清涼殿ノ中ニアリ朝餉ハ清涼殿ノ中ニアリ

臺盤所 西宮記ニ曰ク臺盤ハ清涼殿ノ中ニアリ

山抄ニ曰ク女房ノ侍ル所ヲ女房ノ侍所ト方ニ曰ク女房ノ集ル所ヲ女房ノ候所ナドイフ

母屋ヨリ簀子ニ至ル間ヲ孫庇ト云ヒ簀子ヨリ外ヲ廂ト云ヒ廂ヨリ外ヲ簀子ト云ヒ簀子ヨリ外ヲ孫庇ト云ヒ孫庇ヨリ外ヲ簀子

ヲバ六間ニワリテ柱ヲ立タリ上ノ戸妻戸ノ内ヘ櫺ソバニ小蔀アリ一間ノ奥ハ壁ニソヘテ御倚子ヲタツ此ノ御倚子ハ昔ノマヽニテ今迄アリ関白御倚子傍ニ著座スル也其前ノエンハ小板敷トイヘルヘ職事此ノ所ニ候ノヲリハ五位ハウルハシク居サスル片膝ハキナガラ片膝ヲノボセタリ此ノ座ニ著又椁ノ間ヲ執スルメ人ニアリ小板敷上三間ニ柱ヲ立テ西ノ間中ニ又小キ柱ヲ立横サマニ木ヲ渡シテ椁ノ疊ト云テ御傍倚子ノ覆ト

リテ懸ル也覆ハ蘇芳ノ綉ヲ練タル差シ縫ヲ敷満テオノ端ニ疊ヲ敷ク奥端各一帖而也未ノ横サマニ又赤縁ヲ敷ク後ノ方ハ切疊盤ツギハ尺二脚也其末ニ火櫃二ツ置夏ハ火櫃ヲ取テイキダニキノ盤ヲ置奥ノ疊ノ奥ノ方ニ籍ヲ立殿上人ノ名ヲ三枚ニ誌タリ上ハ四位中ハ五位下ハ非藏人也名ノ下ニ紙ヲ押テ上日ヲ付ル放紙ト云夜ハ袋ニ入ル昼ハ帙ヲタヽミテ机ノ下ニオク其次ニ日記ノ唐櫃ヲ立ツソバノ柱ニ配膳ノ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

番ヲ書テ押タリ四番ニ折ル未ニ脇ノ戸ア
リ下ノ戸ト云ッ傍ノ壁ヲ小壁ト云追儺ノ殿
上人此壁ニ押也未ノ柱ヨリ校書殿ノ後ニ
縄ヲ張テ鈴ヲ付鈴ノ縄ト云蔵人小舎人ヲ
召時鳴ラスト云ヘドモ五位ノ蔵人非
蔵人ニ六位ノ蔵人ニ職原抄ニ六位ノ蔵人ノ
事ヲ挙ラレタル非職ノ者ハ
事ヲ禁秘抄禁掖秘抄ニモ
ハレヘル非蔵人ヲ殿上ノ小板敷ヨ
候ズル也然ニ式部丞侍郎ハ式部少輔ノ唐
名ナリ玄式部丞トヨリ
名乗ル也ト云ヘドモ五位ヲ誤
記歟ト北畠准后ノ
ヲモムキアリ

八式ア少輔ヲ蔵人ト一時ノ事也ト河ベ多之叙
爵モ既ニ在衛ハ五位ニ始テ五位ヲ
ヲ微高三台星玉解人
玉象ヲ表ラン事ヲ先天象ヲ察ン
ノ形雛子ノ如ク地ノ球ヲ知ベシ柿天地
なり天ヲ外ニ運転周旋テ青水也土地ヲ海
永モ一大丸ニテ大空中ニ静居ヲ
方四隅上下ヲ別ナク地居乗船ノ人ノ戴ク
所悪ク地なり井池ヲ堀ル其堀ル

所忽天と変り其土を堆たる所忽地と変な
ん又平地を行こと数万里を経ざるまゝなく
圓形ゐ随て下向し舟波濤を行て数万里を
過ぎるもそれ圓形なりと雖て下向するれど
各〻の己ゞ下向なるをいはゞ地球の地球
何故ぞ地海一丸となりて大空中ゐ静處とゆふ
て佛ゐ四風輪住持をもて以ふるもの如たること
なて天ゐ氣の集成せるなればいはゆる地球
ゐ中に保ち万物をして地球を離しめざる水
の性下り金石ゐ性沈むも天の気ゐ押壓せう
ゐ之塵芥ゐ風ゐ揚り烟火の上ぶなゐ立
昇るゐ地球の中ゐ風氣のさゞまて天の所
為ゐあらだ大塊の噫氣といつるもの如
き天物ゐ如きを知つ

平戸ゐ城主深淵翁ゐ文政十一年ゐ
秋西國四國九國の間高潮荒たるをり平戸
ゐ沖を舟艘ゐ数百艘ゐ舟艘ゐ処ゐ小東洋中ゐ
ごとく漂上ゐあり此ゐ鳥なども幸ゐミ
かゐとも如ゐ口ゐず波浪ゐ音もなく
海を四方を見めぐらすゐ一面ゐ潮干て舟
舟ゐ中ゐ艘たりいだ神をゐ
移もぐらんをゐるほどゐ二時ぞゐ
りしゐ舟うびゐ乾出潮
ゐ引ぞりめゐるゐ
きとゐひさぐぜりゐ
ゐあゐ多ゐ地球ゐ山海

一大丸ゝて九天の真中(ちう)ゟ雨(あめ)ふり地(ち)震(しん)激動(げきどう)して雨(あめ)ハ風雷(ふうらい)電(でん)或(あるひ)ハ地震大風(ぢしんおほかぜ)の毒(どく)ありて西國四國九州(さいこくしこくきうしう)の諸(しよ)國(こく)高潮(たかしほ)打寄(うちよせ)カラ〳〵と波(なみ)ばかりなる所(ところ)ハ滅亡(めつぼう)なれども地心(ぢしん)あるゆへ地(ぢ)震(しん)を吹拂(ふきはら)ひ去(さり)なるゆへ地震(ぢしん)ハ少(すこし)なく其(その)上(うへ)十二年(じふにねん)の春越後(はるえちご)ゟ始(はじめ)て朝臣(てうしん)又(また)文政(ぶんせい)十一年(じふいちねん)の春越後(はるえちご)ゟ出羽(でわ)へかけて地震(ぢしん)ハ家宅(かたく)没倒(ぼつたう)し人畜(にんちく)数(すう)を知(しら)ず山川(さんせん)崩壊(ほうくわい)して国土(こくど)変(へん)じ其(その)ほか諸国(しよこく)大地震(だいぢしん)ゟ山川(さんせん)崩壊(ほうくわい)して国土(こくど)変(へん)じ其(その)数(すう)を知(しら)ず

又(また)ハ

ごろなり天は九重あり地も上の最初
一層を月天とて月の廻る天也第二層は水
水星天とて水星の廻る天と第三層を金星
天とて金星の廻る天と第四層は日天とて
日乃廻る天也月天より上は四層高き天と第
五層は火星の廻る天と第六層
も水星天なり水星の廻る天と第七層は土
星天なりて土星乃廻る天と第八層は列宿恒
星天なりて列宿恒星の施す天と第九層を宗
動天と宗を主と宗室の宗の字義なり

此天外層より此内の八層天みれども互に
とり相共に東より昇りて西へ没り又旋(メグ)り
て旋動(メグリウゴ)ばかり宗動天とをきいへども也此宗動天
の外郭も常静天とて動(ウゴ)ざる天あり或説ふ十一天とし佛説ふ廿三
天とをわれど共ようけがりでしかく天も東より
西へ左旋(ヒダリメグリ)して間断(タエマ)なきゆえ南北極の二
端あるて宗動天の枢紐となりゐも揺動(ユラユラト)
し然(サ)れども常静天最外の静居(ウツカヅカ)を雞子(タマノ)殻(カラ)の
ごとく其内の南北の二極の樞静居(ウツカヅカ)して宗動(ヨリ)以

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

内の九天球左へ旋ること車軸を不動して
車輪を旋ることく一九天北景内北月天を旋
動中ゐ地海の圏形静然と保ちて懸空居る
やうなれど天地の間ゐ動物い景外層の
常静天と南極北極北二枉と地海球とあり
月ハ月天を旋て地球ゟ遠し水金の二星天ゟ月の上日ハ下
ゟ地球ゟ遠し水金の二星天ゟ月の上日ハ下
の天之火木土星及恒星の四天ゟ日上宗動
下北天也此等北天の日月星辰東ゟ出て
西ゟ没地下を旋ゟ又東ゟ出西没ゟ天ゟ

左旋ゟいふ之日輪春秋の二分ゟ旋ゟ
赤道ゟいふられ南北平分の景中なり赤
道ゟり南極ゟ迄て九十度北極ゟ至ゟ九
十度之南北極の間九ゟて百八十度日本道六
千九百廿里余之此赤道の南北各廿二度ま
ゟ隔て黄道あり南の黄道ハ冬至に日輪旋
行の線此黄道ハ夏に至に日輪旋行ゟ線之
南北の黄道の間四十七度余双ゟ熖帯ゟいひて其下北國土ゟ実熱甚し熖帯ゟ正中に
し其南北ゟ各二帯寒帯ありて共ゟ五帯

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　ガラス使用

なり日本唐土天竺阿蘭陀なぞの此北正帯
より下なる國土なり南北正帯の間を時
候平和よく土地豊饒之南北寒帯ハ南北
極の下に在て日光遠く大寒冷不毛の地
之半歳をもて晝とし半歳をもて夜とす
人國氷海多と此間より寒帯の下ハ晝夜長短ありて寒帯より
漸々昼夜平分其外ハ漸々昼長春夏候の
てゞゝ氣候倫勝なり南北極迄
天頂とし赤道を天腰とするも人の休あると
ゝ北極を首とし南極を足とするも也

北極の下ハ春分より海ハ皆晝秋分比漸ハ皆
夜之南極の下ハ秋分海ハ皆晝春分漸ハ皆
夜之ゆゑ一年ゆゑ一晝夜ゆゑ
日月横疑して極星北を常に頭頂に見
ぐ之天蒼色も實ハ闇黒にて日光の照映を
受て蒼きを以て地球中に六大洲四大海あ
り亜細亜大洲ハ日本漢土天竺安南呂宋占
城朝鮮女直韃靼なと此中にあり歐羅
巴大洲ハ其西に續なり阿蘭陀ハ此中の一
小國之利未亜大洲ハ歐羅巴の南に續て亜

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　ガラス使用

細亜の西南方なり赤道以南より北
正帯熾帯南亜帯より地之亜細亜
小東洋を隔て東より北亜墨利加大洲以
上四大洲は皆赤道より北にあり亜墨利加
大洲より南へ續て南亜墨利加大洲あり
は赤道の下より南にさし出たる國なり熾
帯南正帯に渉る地多し此五大洲の南は海
を隔て墨瓦臘泥加大洲より廣大にして
しく南正帯南寒帯に渉り小東洋にさし出
なり是より半春道の真下にあり亜

り熾帯に渉りて南北極共に間遠くして
見えず高山は頂まで雪を戴き両極の星地下より
著て見ゆ日輪は寅時より亜墨利加大東洋まで
出申時に小東洋日本は上に在る其間百八
十度にて唐法四万五千里之日本道七千
時より大西洋以西把尼亜の福嶋まで至る其間
二百里許之
ける百八十度之内九万里日本道一万四
千四百里許之
也一昼夜十二時より閏疑終る之然る亜墨
利加大東洋と以亜把尼亜の福島は東西の
首尾附合て圓象成所之利未亜欧羅巴の

西海ハ大西洋ヲ亜細亜ノ南海ハ小亜細亜
亜細亜亜墨利加ノ間ノ海ハ小東洋ヲ日本
蝦夷琉球呂宋ナド此小東洋中ノ嶋ヲ亜墨
利加ノ東海ハ大東洋ヲ此ヲ四大海トイフ
北寒帯下ヨリ氷海ヲ南寒帯下ヲ墨亜尼
加大洲ノ巻地ヲ海ヨリ包ミ日輪ヲ繞ク十
二時ノ間東西ヲ地球ヲ旋ヲ其照處ヲ時ハ
昼其陰ルフ處ヲ時ハ夜トナリテ東方ノ卯
時ハ西方ノ酉時西方ノ卯時ハ東方ノ酉時
南北極ノ間ヲ百八十度地下ヲ経ヲ数ヘ
百八十度合セテ三百六十度ノ周ヲ北
極ハ天地乃頭首不動柜處寒帯地ノ正頂ヨ
リ以下ヲ周圍ノ経七十二度乃至緯微垣ト
いひ其垣内ヲ紫微宮垣ト云ヒ乃至
十余星列座セリ和ヲ太微垣ト云ヒ乃至
間ヲ営リテ廿余星列座セリ天市垣ト云ヒ
垣ハ一構ノ義ヲテ群星ノ見ルヽ一様ノ
中ナレバ之四維トテ廿八宿其外ヲ遠ク東
ハ角亢氐房心尾箕ノ七星之南ハ斗牛女虚

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　ガラス使用

危室壁の七星之西ハ奎婁胃昴畢觜參ハ七
星之北ハ井鬼柳星張翼軫の七星之三垣の
中紫微ハ正中ノ一垣之太微ハ北方ノ翼軫
ヨリ迎ク天市ハ東方ノ房心ヨリ迎ク此二垣
ヲ左右ニ侍衛スル星垣之次ニ紫微ヲ中垣トシテ宮
寢位之天子燕息の處トシ外ニ在テ大内ヲ為ス
太微ハ上佐ヲ坐シテ朝廷位ヲ定ル天子聽政の處
の處ヲ為ス天市ハ下垣ニシテ明堂位之天
子行幸の儀則ヲ為ス然バ紫微宮寢ヨ
リ天子臨テ朝夕往ヲ太微朝廷ヲ天子
臨テ政ヲ聽ヲ天市明堂ヲ天子行幸シ
テ肴察シ給フ紫微垣中ヲ紫宮トモ紫宮
トモ中宮トモ云フ春秋元命苞（古微書ノ卷ノ毋之ノ）
太微為二天庭一五帝以合時紫微為二大帝中有一
五帝座一五帝合明天生大列為中宮天極星其
一明者太一常居也傍両星臣辰子位故為北
辰以起二節度一亦為紫微宮宋均以為十二宮中（宮也）外位各宮總謂之紫
之言此也宮言中也言ハ天神圖法陰閉
閉皆在此中也又宮之為言宣也宣氣立精為
神垣也云々孫穀接二准南子一太微者太一之庭

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　　ガラス使用

也紫宮太一之居也云々春秋演孔圖（古微書巻八収）
之曰紫極宮内諸侯為二外蕃一三公為二中輔一云々
此中北極五星一名北辰一名天
極といふ五星の第一は太子之第二の最
大なる帝之第三は庶子之餘の二星は後
宮の屬之北極不レ動故云北辰居レ其所一而衆星
共レ之一といふこれをレ動かすをレ微動
なき也又不レ分別一之三師の三星三公三星四
輔の四星など紫微垣中にあり太微垣にも
五帝の座及三公の三星三台の六星九卿の
三星などあり天市垣にも帝座及諸侯の星
あり三垣の外の四維の廿八宿あり皆紫微
宮を仰て隨従せり象之南極ともく北極よ
なども不動の處なりて宮垣四維の諸星あり
ど後漢共に赤道以北正帯下の國ゆゑ常は
南極を窺見あるゆゑ故に北極の星象を考
察して說をなすなり太微垣の三台
を一台各上下二星ありて共に六星なり史
記天官書に魁下六星両々相比者名曰三能
々々色齊君臣和不齊為二乖戻一云々注に蘇林が

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　　ガラス使用

曰音三台索隱曰漢書東方朔願陳秦階六符孟康曰秦階三台也星九六星六符六星之符驗也應劭引黃帝秦階六符經曰秦階者天子之三階上階上星為男主下星為女主階上星為諸侯三公下星為卿大夫下階上星為士下星為庶人三階平則陰陽和風雨時不平則稼穡不成冬雷夏霜天行暴令好興甲兵修宮榭廣苑囿則上階為之折也云云漢書天文志云云晉書天文志曰三台六星兩兩而比者曰三能三能色等君臣和不等為弄戾云云晉書天文志曰三台六星兩兩而居起文昌列抵太微一曰天柱三公之位也在人曰三公在天曰三台主開德宣符也西近文昌二星曰上台為司命主壽次二星曰中台為司中主宗室東二星曰下台為司祿主兵所以昭德塞違也又曰三台為天階太一躡以上下一曰泰階上階上星為天子下星為女主中階上星為諸侯三公下星為卿大夫下階上星為庶人所以和陰陽而理萬物也云云隋書天文志亦同春秋漢含孳古微書卷十二收之中三公在天為三台云云宋書天文志曰三台為三公云

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　　ガラス使用

晋書天文志ノ拘南三星及魁第一星西三星皆曰三公主宣徳化調七政和陰陽之官也（即北辰之傍三星ノ三公ニ按三公星在北斗拘東又三公一在北斗魁西若天極傍者非三公也ト云ヘリ（隋書天文志亦同）又大微垣ノ諸者ノ東北ノ三星モ三公ノ内ニ在トされバ三公星、紫微垣ノ二處ニ處ありなり里三秦説ノ未央宮一ニ名ノ紫微宮ト云ヘリ唐書大衍

云ヘル三公ハ上應三台ニ台司ノ者三公之位也云々ナルヲ又重又紫微垣ノ拘東北三星ト魁第一星ノ上ニ在ル三公ノ象之史記天官書ニ中宮天極星其一明者太一之常居也後勾四星ノ末大星正妃之餘三星後宮之屬也旁三星三公子屬環之匡衛十二星藩臣皆曰紫宮ト云ヘル注ニ正義曰三公三星在北斗拘東又三公三星在北斗魁西並為太尉司徒司空之象ト王愛理陰陽主佐機務ト云ヘリ（漢書天文志亦同此文錯乱今改正而引

文徳皇后傳ふ妾托體紫宮尊貴已極ルさ
さらにさ宸居ふ紫微宮ふ字ありといふる例
おもふべし續日本記ふ高野天皇受禅改皇
后宮職曰紫微中臺置紫微内相よしみゆさ
て九天三垣地球のごとき小神代紀淮南子
枹子物理論續博物志ふ学緝珠事林廣記管
窺輯要三才圖會通雅天管考異續古文苑西
方要記天経或問などをもしめ諸書ふ通考
せる定説ありて余ぐ臆断みあるべし又西洋ふ
天静地動の説あまぜそは尚書考霊曜みも
やそこそこありて別
まを用なけまば言及さで止ぬ

第二からぢごくまで

○俗はかうぢごくれそうぢ
ゐ訛ありさくさ事ありて田舎人ぞあらぢんぶく迷
上説いへらふ家厨ふ竈ふ三宝荒神棚ふ
御前ぬまばしうれて他処ふ居りふ心ゐ
たれり空穂國譲下巻七十七丁右ふ如方ぞとふ
はあらで夕ぐまうれまるぞこうぢんぶくれ
せうるなりやこそまうれまるて四ふ訛なども陰

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

るおいひたまバ此を如実とそくべし

第三魋なき男の貂ばこう貂裘

○源平盛衰記廿三の巻十七左 依行家謀叛水曽上路の第十木曽西國下向之時乳母樋口次郎兼光ヲバ京守護ヲ俟へトテ留置タリケルガ十一月二日早馬ヲ立テ十郎藏人殿ヨリ魋ノ内貂誇トカヤノ様ニ院ノキリ人シテ院宣ヲ給ハリ木曽殿ヲ可奉誅其聞エ候へト申下タリケレバ云々長門本平家物語十五の巻十四五丁 妹尾太郎兼康合戦の条ゐ京の男女ゐ

かりけり樋口の次郎兼光平馬を迎中略かの十郎蔵人どのこそ心ゆかぬものなきまゝかそんは云々略てかのきりへ〳〵木曽殿を討とらんとてこそ下らせ給けるが云々宣賜ゐ讀申巻卅四丁左 ねびみざしはうまつきて梅のてんとねびみハ同類の物なれば貂とそ冠らまほしきてんは和名抄十八の毛群部の巻ゐ貂四声字苑云貂音凋似鼠黄色皮堪作裘和名天牟止黒貂フルキノカワギヌ 唐韻云貂有二黄貂黒貂出二東北夷一黒貂和名布流

木云ヒ類聚名義抄（佛下末巻）豸部ニ貂音凋ト云ヒ黒
貂ノ如キヲ云ヒ以呂波字類抄（七ノ巻天部ニ動物門）ニ貂
テン鼠属也有黄貂有黒貂之ヒ又（七ノ巻不分動物門）ニ
貂ノ如キ出東北夷也云ヒ和玉篇（下ノ巻）豸部ニ貂
イヌノコトキ又テムジヒ節用集（天象門）ニ貂
テンヒ塩嚢抄（廿一段）五ノ巻ニ貂蝉ノ条ニ貂ノ
カ和名ニハテント云リヒ和漢三才圖會（廿九）
ノ巻ノ獣類部ニ貂（ミ）鼬同（ジ）和名天（テン）年黒貂（ノ）和名布流（ル）木（キ）
云ヒ按（ニ）貂在（テ）山中（ニ）状類（スガタ）鼬（イタチ）而（ニ）
似（タリ）鼬（イタチ）而胸腹褐色（ニ）頬短（クダ）而醜（ミニク）其皮為（スルコト）鋒槍（ヤリ）之鞘（サヤ）袋（ト）
時珍（ノ）以為（ニ）栗鼠（ト）蓋本朝謂（リ）栗鼠（スハ）與貂（テン）其類不（レ）遠而
異（レ）也栗（リ）鼠（スハ）乃（チ）鼠（ネズミ）属（タグヒ）貂（テンハ）乃（チ）鼬（イタチ）属（タグヒ）
云（ヒ）老鼬（イタチ）變（ト）成（ルト）貂（テント）然（ル）乎
否（ヤ）能（ク）沿（ヒ）眯（ル）塵（チリ）埃（ホコリ）入（ル）于目（ニ）中（ニ）曰（ヒ）眯（ル）ト云（ヒ）ヒ犬倭本草（十六）
の獣類部ヨ貂又栗鼠トモ云（ヒ）栗（リ）ヲ好（ミ）テ食（フ）テ
ントハ唐音ナルベシ鼬（イタチ）ニ似（テ）大（キ）ナリ其毛長
ク黄色ナリ尾長大也人家ニ入（テ）ヒルカニ味（ミ）
醤（ヒシホ）ヲヌスミ食（ヒ）ノ味醤（ミソ）ニツキテハ毎夜来（リ）ヌス
ミヤマズ中夏ニハ味醤（ミソ）ナシ故ニ此事本草等
ノ書ニハ見エズ中華ノ人此皮ヲ用テ裘（カハゴロモ）トシ
帽子（バウシ）トス貂ノ事本艸集解ニ詳（ツマビラカ）ニ或曰貂ト栗鼠（リス）

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　ガラス使用

一類二物也鼯(テン)大ニ栗鼠ニ似ナリ一物ニ非ズ
本草ニ一物トスルハ誤ナリ云々となんいえる
栗鼠よりも大くしてその
ハ倭産なし卩雲日件録抜尤十二の巻ニ栗鼠
乃貂(テン)鼠(ネズミ)也とみえ田村元長が庶物類纂(抜萃廿二の下
巻部)ニ貂(テン)鼠(ネズミ)を栗(リス)鼠の一名とし黄鼠俗名テム
と注しホ野蘭山の本草啓蒙(四十七の巻獣之三巻類部)ホ
貂鼠フルキ抄和名トツピ(朝鮮解)和産ナシ朝鮮ノ名
物ニシテ唐山ニモナシといへるなどハ共ニ
尽さゞる説ニフルキは朝鮮産なきどテンを

九州中國ニもすくなからず最多く関東ニハ(イトオホ)きわめて
きこえず宮沼拾遺一の巻四丁右鬼(シノ)瘤(コブ)ニ栗(リス)鼠の
をてんの目のごとくなる疵(トモ)ありと
ハ本の若おほまりぬるをいふなるうつ
丁右武蔵部ニ天井ニいたちよりも大きみてん
ちよりもちひさきものおとこそにきたりひ
と云ことなど古書貂のおほくうりさて本草
綱目(五十一の下巻類部)三才圖會(鳥獣三巻)ノなどよんで
し貂はフルキのみときこえ申さど和名抄ニ貂(テン)
黒貂(フルキ)と分て出さるをハ委とにべし源氏河

海抄未摘花ヨリ名ヲ記和名フルキテンドラフ歟
之如ク歟トイクツトナク申黒貂裘（フルキカハゴロ）ノ事ハ空穂物
語藏開中巻二十左　源氏物語未摘花（湖月抄本廿五丁左）河
海抄未摘花ヨリ杜詩注西宮記拾遺歌ヲ引拾遺
歌ハ中古ノ名歌ナレバ引ヲミヤハギヲ古ノ花ヲミ
入ル横川ヨリミヤハギヲ折ケルハ又
ナラヒニ山ナラネバ此ノハギヲ
ハ風ヲマツセノンドヲヨビ拾遺ヨリ已
下多武峰ノ物語并ヨリクルコノヲ
乃下ヒロゲテヨビクチナシ〳〵ソメノウチキ〳〵ヨリネ

ヲヨビノハヽノ如ナルヲ
ハセノ袴タテマツリ〳〵ヲ
山ハヽヲリモテ〳〵ヲ
ヲンドヲヨビヲンナヲヨビ
ヲヒギヲヨビヲヒカケヲヨビ
ヲ池ヲヨビヲ見ヲヨビ花鳥鶯情未
摘花ヲ江次第ヲ引細流抄菖花抄岷江入
楚潮月抄万水一露源注拾遺源氏新釈ナド
ハ異説ナシ三代実録（四十七）延喜式（弾正臺）玉
造小町壮衰書ナドモ（フルヤノカハゴロ）裘ノ夫木抄雑

十五衣部ニ知家ノ歌ヲ引テ
後ニ見ルベシト云ヘリ
ハヤウセニケリ
福ノ神
第四ノ山ニ
○新撰六帖ニ子鷲信實ノ
ヒゴ此ノ史ノ木抔雑ノ
詠草ニ鷲ノ
ノ山

ヲ引テ此ノ山ニ鷲ヲ
ノ外ニモ此ノ山ニ
祖ノ山ニ鷲ノ
ニ
若草子十二ノ下ニ
ヨリ
ノ
ノ
ノ

そのうへあり新撰字鏡鳥ノ部ニ鵹疾徂反去和志云ミまゝ鵹和志又加伊志ゝ類聚名義抄僧中巻鳥部ニ鵹鵹鵹鵹音就ヨ永シ禾シ云ミ鵹音凋禾シ鵹鳩禾シ云ミ字鏡集三の巻鳥ノ部ニ鵹ワシ云ミ鵰雕同ワシクマタカ云ミ鵹鳩同疾徂反ワシコワシ云ミなどゝ見えたり（ん）けり埤雅八の巻釋鳥ニ鵰雉食草似雁而大黒色ノ俗呼ヲ皁鵰一名鵹其ノ飛上薄雲漢トあるもよりおとせんどりの山を雲鵹山と止觀

科解一之一巻（十四丁左）ニ中鵹頭者說文云此鳥黒色多ク子山形似鳥故以名ノ為又具山側ニ有リ屍陀林鵹食屍竟多居此山故以名之又多ク聖靈所居故名靈鵹亦名鵰是亦名鵰跡増一三十一佛告諸比丘此ノ山久遠同名靈鵹更有餘名汝等知ルヤ不ヤ亦名廣普山白壔山仙人山恒有神通諸得道羅漢所居又有五百支佛居之云ミ仁王経良賁疏上之一巻（卅二丁右）ニ鵹峰山者梵云姑栗陀羅矩吒唐云鵹峰亦云鵹臺智論二義山頭似鵹故云鵹頭又云ノ玉舎城南屍陀林中多諸死人衆鵹来噉還

止山頭時人便名鷲頭山也又別記説言靈鷲者
此鳥有靈知人死活人將欲死君翔彼冢待其送
林飛下而食以懸知故号靈鷲又真諦記引毘沙
説釈迦菩薩化受鷲身廣如彼文繁而不録玄ゝ
仁王経疏門人灌頂記一の巻十五丁左ゟ王舎城中
有六精舎云ゝ六者闍崛山精舎者闍崛山此山
翻靈鷲釈迦菩薩昔為鷲鳥於此山中養育父母
從此得名故名靈鷲又王舎城南有冢陀林鷲鳥
居之多食死人欲死者鷲翔其家悲鳴作声人
以預知人死故称靈鷲又山有五峰東方象頭
南方馬頭西方羊頭北方師子頭中央鷲頭亦得
名鷲山也問佛何故偏於王城中向鷲山説法耶
答依法花論云如王舎城勝於餘城者闍崛山勝
於餘山以佛在勝處故顯此法門勝也云ゝ西域
記九の巻（八丁右）摩掲陀國下ゟ宮城東北行十四
五里至姑栗陀羅矩吒山唐言鷲峯亦謂鷲臺
北山之陽孤標特起既棲鷲鳥又類高臺空翠相
映濃淡分色如来御世垂立十年多居此山廣説
毘奈耶法頻毗娑羅王為聞法故興發人徒自山麓至
峯岑跨谷陵巌編石為階廣十餘歩長五六里中

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

路有二小窣堵波謂丌衆即王至此徒行以進一謂退九即簡九夫宋本同往其山頂則東西長南北狹臨崖西面有龕精舍高廣奇制東闢其戸如来在昔多居說法今作說法之像量等如来之身云ゝ翻譯名義集三の卷衆山篇ほ耆闍崛大論云耆闍名鷲崛名頭是山頂似鷲增一佛告諸比丘此山久遠同名靈鷲觀経疏云諸聖仙靈依之而住西域記云宮城東北行三四里至姑(汨乙)栗陁羅矩吒此云鷲峯亦云鷲臺舊云耆闍崛訛也既棲鷲鳥又類高臺應法師云案梵本無靈義此鳥有靈知人死活故号靈鷲婆沙云其山三峯如仰(ヲ)鷄足似狼之迹亦名狼迹又名善賢山白塔山仙人山負重山云ゝ水経註一の卷(十一古)河水一ほ釋氏西域記曰耆闍崛山在阿耨達王舍城東北西望其山鷲(本此處錯簡今據宋本改正)有両峰雙立相去二三里中道鷲鳥常居其嶺土人號曰耆闍崛山山名耆闍鷲也又竺法維云胡語羅閱祇國有靈鷲山胡語云耆闍崛山山是青石頭似鷲鳥阿育王使人鑿石假安両翼両脚鑿治其身今見存遠望似鷲鳥形故曰靈鷲山也數說不同遠通亦異今以

法顕親宿其山誦首楞厳香華供養聞見之宗也
云〻法顕傳（サニ丁右）ま到耆闍崛山未至頭三里有
石窟南向佛本於此坐禅西北三十歩復有一石
窟阿難於中坐禅天魔波旬化作鵰鷲住窟前恐
阿難佛以神足力隔石舒手摩阿難肩怖即得止
鳥跡手孔今悉存故曰鵰鷲窟山云〻大智度論
三の巻（五の巻左丁）ま耆闍名鷲崛名頭問曰何以名鷲
頭山因名之為鷲頭山復次王舎城南尸陀林中
多諸死人諸鷲常来噉之還在山頭時人便名鷲
頭山是山五山中最高大多好林水聖人住處云〻
佛祖統紀（五の巻六丁右）迦葉傳ま其山三峯如仰雛足
即靈鷲山こゝ以外あまた云〻挙るま遑あし
鷲頭鷲峰鷲臺耆闍崛山姑栗陀羅矩吒山廣普
山白壌山仙人山雞足山狼迹山普賢山負重山
など梵漢の名あまた靈鷲山を普通の称
とす（雞足と鷲峯ハ同処あしらく統紀の説ハ
多ハそばらく）ものまうつ中鷲
頭ハ東象頭南馬頭西羊頭北師子頭の四山の
中央なあまバ之名義ハ其山形鷲頭ま似る
ゆゑとも天魔波旬鵰鷲に化して窟前ま住る
ゆゑとも靈鷲なあしく云ま歌ま

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　　ガラス使用

もとゝの山ゝのみゆきもとゝの
根なとよめるいとあはれなり

第五鉄輪五徳

○鉄輪のまとゐ五の巻第十段ないつゝきに
又おもと挙平家物語剣巻る嵯峨天皇御時或
公卿ノ娘余りニ物ヲ姫ミテ貴船大明神ニ七
日篭テ祈ケルハ願クハ生鬼ト成シ給ヘ姫
マント思ハン女ヲ取害サントゾ申ケル示現
ニ云ク鬼ニ成リ度ハ姿ヲ作リ替テ宇治河瀬
ニ行テ三七日浸ルベシサラバ鬼ト成ベシト
示現アリ女房悦テ都ヘ帰リ人モ無キ所ニ
立入テ長ナル髪ヲ五ニ分テ松ヤ子ヲ又リ巻
上テ五ノ角ヲ作ケリ面ニハ朱ヲサシ身ニハ
丹ヲヌリ頭ニハ金輪ヲ頂テ三足ニハ松ヲト
モシ續松一把両方ニ火ヲ付テ中ヲ口ニクハヘ
テ夜深人閑リテ後大和大路ヘ走出テ南ヲ指
テ行ケレハ頭ヨリ五ホムラ燃アガリ眉太ク
カ子グロニシテ面赤ク身モアカケレバサナ
ガラ鬼形ニコトナラズ因テ是ニ行合タル者
ハ肝心ヲ失ヒ倒臥死入ラズト云事ナシカノ

シテ宇治河瀬ニ行テ三七日浸タリケレバ貴船大明神ノ御計ヒニテ彼女作生鬼ト成又宇治橋姫トモ是云トゾ某ル云ヽ謡詞鉄輪ハ此ノ如キ姿ヲ名負ヒテ毎朝丹ヲ塗リ頭ヨリ鉄輪ヲ戴キ三ノ足ヲ火ヲ焚トモ燃ルバ鬼神ト成ナンヂ云ヽ

卧雲日件録 秘元ノ第四十八冊長禄四年閏九月十六日ノ条ノ前列季瓊ガ話ニ就テ管領門ニ有落書一盖シ画鉄輪ヲ去テ二足ヲ存シ一足ヲ置テ碁盤上ニ其意武衛畠山細川此ノ三家謂之三職ト猶三足鉄輪ノ今武衛畠山皆辻此ノ沢ハ細川ノ御番也碁盤其音相類故也云ヽ運歩色葉集ノ加ノ部ヨ鉄輪カナワ云ヽ増補下学集下ノ二巻器財門ヨ鉄輪カナワ云ヽ五徳ゴトクノ事ト節用集大全二ノ巻加ノ部ヨ鉄輪カナワ云ヽ書言字考器財門五徳ゴトクノ事ヲ部ニ出ス

○

帖器財箋四茶酒油ノ部ニ鉄三脚子ゴトク本事方治ニ太一神精丹ヲ下ニ用ル鐵三脚子随テ釜ノ之大小ニ高サ不過二一尺五寸一其下ニ置ノ火ヲ約三斤以テ漸ヲ益ス之常ニ及ブ五

斤云ヽなどゝ見えて五徳と
玉液のなるべし

第六鞆繪巴の字巴文

○婦人養草五の巻十七段雑藝のるけ書と
云物の辞なり云ヽ四ヽ白薇やう小宣旨の紙
まきあげの筆ともかくもかくもかいくゞる筆のぢくやう
ことりゝ云ヽ拾葉集上巻五節末の段ゟ季春
の乱舞をてぬきてバ白薇やう小梓師の紙巻
楊の軸ゟくゝ云ぞお
ぼゆるヽ源平盛衰記一の巻五節始の段ゟ

五節ト名付タレ彼舞ノ手ヲ摸シツヽ雲ノ上人等
トカヤ其時柏子ニハ白薄様厚薬紫ノ紙巻上
ノ糸鞆繪書タル筆ノ軸ヤトハヤ也仙女ノ衣
ノ薄透通リテ厳キ有様カ薄様ト厚薬紫ノ紙
ニ相似タリ舞ノ袖ヲ翻ヘスタナビキ
ル貌絲ヲ以テ巻タルガ如ク鞆繪ヲ書タル筆
ノ軸ヲ差上タル様ナレバ昔ヨリ五節ノ宴酔
ノ肩脱ニハ必カクハヤスヲ云ヽ平家物語一
の巻殿上闇打の段ゟ五節ニハ白薄様ニゼン
ジノ紙巻アゲノ筆巴カイタル筆ノ管ナント

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

云様々加様ニ面白キ事ヲノミコソウタヘ舞ルヽニヤヽ長門本平家物語ノ巻ノ上ノうゝぬぎの袴ゟハゝそろひあげの菊巴ゟきんどすをゟをゟヽ

袴ヲ被著ヲ被ヲ召ヲ

○江家次第十の巻新嘗祭装束の条ヲ其面ニ懸ニ直帽額ヲ不隠ニ鞘緒ヲ木工寮作ニ舞臺ヲ左右衛門進ニ榲桲ヲ云ヽ

○宮物集五の巻廿五丁左ヲ楚王眉間尺朋友云ヽ其三ノ頭ノ鼎ノ中ニシテ巡レル様巴ニハ形ド

レルトモ申シ侍ルメリ云ヽ

○明月記寛喜元年十一月廿五日の条ヲ半部ノ車鞦繪小八葉之程ヲ加テ如ク五目ノ被置切物見車也云ヽ

○伏見院宸翰装束抄或名三條装束抄衣服事の条ヲ他家異文祀云ヽ大炊御門亀甲洞院の藤鞦繪自餘、唯今不學倍云ヽ

○太平記廿四の巻天龍寺供養の段ヲ竹林院大

納言公重卿濃香ニ牡丹ヲ織タル白裏ノ狩衣
ニ薄色生ノ衣洲流ニ鞆絵藤の丸青鈍ノ生ノ
織物ノ指貫ニテ御車寄ニ参ラレタリ云ト
按ニ藤ヲ以テ巴のさまをいふ歟
なるべし

○同書廿六の巻大地震の段ニ胴ノマハリ二十
尋許ナル大鼓ノ銀ノビヤウヲ打テ面ニハ巴
ヲカキ臺ニハ八龍ヲ拏ハセタルガ顕ハレ出
タリ云ト

○師卿公秀記康永四年八月廿日の条ニ竹林院

大納言ノ舎人以テ金銅三鞆絵毎ニ閑目一附之
○嵯峨抄一の巻六十五段ニ武士幕文中ニ文字
難知多シト巴トモ云ヘリ角巴ツノトモ云ト
○諸家紋帳ニ若巴の紋ハ曽我佐ヶ木奈良松
兵部少輔改則宇都宮山田道祖千代丸丸豊前
七郎朝連芝山三河守持副金山左巴ハ小山山
下左京亮大平迫薮田平木小早川新関次郎元
實など或ハ一或ハ二或ハ三或ハ九ツ付ケタル
あり
○船弁慶謡ニ長刀ヲ持タル巴波の紋ヲ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

○謡曲拾葉十三の巻みくさ
なりけんというづまくらの処
集云蔦茂詩ニ水成巳字ヲ初三日源ト起ニ園年後幾霜
矣巳ハ水ヲ畫形之字ノ如ク蛇又蛇の名
水蛇ありて在ル貌巳のごとし博物志曰呑巳蛇象
三歳而出ス其骨矣三巳記云閼白水東南流曲折
三廻而如ニ巳字一矣云々
○百番謡抄日向延岡佐久間観潮著二の巻ニ巳は難刀の手
之如浪のあるき形をいふ唐の浅江かどいふ
ちいへり紋を浪の文をいふ如ニ巳波の紋
みくしなる紋をいふそのかたちを縁をとりて
○飛鳥井二楽記鞠百首ニ
おもふこともみな
の丸も我も水比紋とそりてハ誰のかまし
○名月抄名船篇ニ異文ハ諸家大臣已婚著ル文家
々之説不同ニ當流藤鞠絵ニ
○天野信景の塩尻二の上巻ニ左巳ハ如ニ左巳と
なりと云又十六の巻布ノ帽額ノ第ニ簾ノ端及帽

額ハ画ク紋ヲ略セリ○鞆ハ弓ノ左ノ手ニ
紋ヲ鞆絵トイフハ図ノ如ク十ノ下巻ノ葵ノ
紋源敬公河相傳ノ説ハ誤リニシテ源頼義源
頻男義家ヲ石清水ノ神氏子トシ八幡ト称
称ヲ當社ノ神紋ヲ賜ヒシヨリ始メテ葵ヲ
ノ紋トシ又男義光ヲ賀茂社ノ烏
帽子ヲ擬(なぞら)ヘ加茂ノ次郎ト称シ又義光ヲ並ビ三井寺ノ新羅
旗ノ紋トシ又三男義清ヲ新羅三郎ト
ノ神ノ烏帽子ヲ賜ヒシヨリ新羅ノ神ヲ
又波神衣ノ紋ヲ以テ別義ヲ紋トシ又

東南流曲折三廻如二巳字一故名二三巳一ト見エタリ
世ヨウツゴトモ巳ノ字ヲ書テ水ヲ流ス
ル水ノ縁ヲモトヨリ水ヲ厭ヒ巳ノ字ヲ避
ル故ニ曲水之宴ヲ巳ノ字ヲ書テ水ヲ流ス
ヲ営家江家ノ詩ノ序ニモ四季物語ニモ見
エタリ其ノ義ハ水ノ縁ヲ廻リ水ヲ流ス
ヲ廻リ巳ノ字ヲ書テ水ヲ流ス
ニ見エタリ○戦ヲ巳ノ字ヲ避ル
ヲ云ヒ伝ヘシ事今昔物語ニモ○天野氏ノ
説ヲ楽ノ駄太鼓左方ハ三頭ノ右巳右方ハ二

改の右巴也と雲雷の古文字より変したる
と雲雷を云因とも当巴雲紋を俗のいふなり
といひ雲紋を俗にうづまきの巴の字を
鞆絵とよむも水の渦く象ありまは雲雷お用ゐ
るものなりとは雲雷之象以金飾之といふ事
詩云駟彼金墨々有畫雲雷之文といへり○幕の紋に角巴といふ
なり○巴大将と藤原公経公也家の車に鞆絵
を畫しより呼也○木曾義仲の妾巴女大力な
ゐの由尚別田氏大中黒の由紋を根本とせ幕お
り鞆絵を御家の秘紋とせしを徳川家へ仕へて
ひ親氏公三河加茂郡入御の後御威勢も盛
おの御子数多生れさせ給ひし後那名をも
て加茂の名字と称し御家の鞆絵の御紋を
葵と書かへられて御一黨の御旗幕も丹
つきのよ 也今此葵鞆絵の御紋を
もちゐ給ふ
○大權現御末葉此時より
之

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

梅葉師紋のごとく、吾友竹尾覚森が蓼沖紋
考ふるごとし
○倭訓栞十八の巻登部すとも名江次芳の鞆
繪と書り鞆の面も繪ならく文也今鼓面も画
くを又同し○江次芳彰壽會裝束考に
権ニ舞臺ニ云ニ懸ニ亘帽額ニ不ト隠ニ鞆繪ニいつる
八今いふ釘隠しの事也とりくり意永官
符ノ戈の事ゐも金ー銅ノ鞆繪ニ教弘下尺ノ寸
四分ともくてくり○已の字を也い鞆繪野
已字なき式訓せし也云已詩閒苑白水

ごとく人口も難笑を洪和田義盛の妻となる朝
夷三郎を生ぬ事ゆゑ別せし時年二十八未曽七手組の一將ぐく功
あり後尼ぐ剃。越後友朽ち給ふ後ぐ
九十一歳といへり三條河原の残み重患迎て
已ん證の神を招已鞆を鳴て神影といへ
り朝夷義秀是利義氏を追て甚鎧を捉義氏馬
を躍ら渥を跨證の袖斬を同日の談あり○已ガ
嶽ハ吉野大臺ノ原より起り已ガ渕ハ其下流な
り○さと鞆繪を鞆のごとく画あけるを

○好古小録下巻五十五談ニ諸器物ノ紋ニ巴ヲ用フル者古昔ヨリ多シテ其形今ト異ナリ古昔畫ク巴ノ形ハ多ハ首尖リテマロカラズ古寫儛樂ノ畫太鼓ノ巴紋神祇官及醍醐寺法勝寺東勝寺ノ瓦ノ巴鹿苑寺ノ供鐘ノ巴紋皆其首尖りタリ云ヘ

神祇官廢址瓦

是醍醐寺古瓦

法勝寺廢址瓦

東勝寺廢址瓦

鹿苑院鐘

○節用集登部食服門ニ鞆繪トモ卫紋也云ヘ巴同云ヘ

○運歩色葉集登部ニ鞆トモ卫巴同云ヘ巴紋ハ傳ヘ巴ノ紋ハ宮社ニ棟木其外金具ニ用テ神紋トスルヨリ傳来シテ常人ノ紋トナス事ナリ神代巻曰於是天照大神乃索取素戔嗚尊ノ十握劒打折為三段瀉於天真名井齩然咀嚼而

吹棄氣噴之狹霧所生神歸田心姫湍津姫次
市杵嶋姫九女矣トモ見ユ
井ノ水ヨリ劔ノ三段トナルニ依テ水ノ形三ツ
頭ノ巴ト成ルノイハレアリ三ツ方へ回テ閇
き形トナルハ混沌ノ形ニシテ真ノ流行スル
イハレナリ三女ノ神ハ日神ノ御心化ヲ封シ
テ祭リ玉フコトナリ是ニヨリテ巴ノ紋ハ深キ
イハレアルコトナリ宇佐八幡宮ニ巴ノ紋ヲ用
ル之字佐ハ三女神并ニ神功皇后應神天皇ヲ
祭リ奉リテ三社トシテ八幡宮ト号シ奉ルナ
リ巴ノ紋ノコ形ニハ紋トナリ真名井ノ水ハ
日神ノ御心ノ元水ナリ是ニ劔ヲフリスヽギ
三段トナルヨリ化シテ清明ナルトコロ三女
神トアラハレマシ混沌ノナリニ神光流行ス
ルヲ神道ノ教ヘトスヘキモ人ニ深ク尊信スヘキ
ノナリ云々

拙ハ此御神の神孫なれば

かくの

○伊勢両宮神宝図ハ内宮鞘口長四寸五分圓
径四寸厚三寸黒漆巴文白緒ニテ外宮鞘

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　　ガラス使用

口長四寸四分丸径四寸厚三分惣黒漆已紋向
各弦云々

按ニ此鞆の製作大神宮式兵庫寮式などに
以テ鹿皮縫ヒ之ヲ胡粉ヲ塗リ以テ墨畫之ニとあるが如
ぜいと後の製なるべし

○伊勢真丈日蔭蘰ヲ鞆繪輪鋒巴字為ス神紋ト上古
射ル人左ノ腕ニ鞆ト云物ヲ著ク革ヲ以テ作
リ其形圓ニシテ腕ニ當ル処ハ平ニシテ腕ニ
巻ク革アリテ緒ヲ付ク是弓絃ノ腕ヲ彈クヲ
防ク器也其中ハ空虚ナル故弦當レバ鳴ル音
アリ常ニ用ル鞆ハ皮ニテ作リテ無文也伊
勢ノ神宝ニ献ゼラルル鞆ハ麻ノ皮ニテ作テ
白キニ紋ヲ黒ク画ヲ延喜式ノ兵庫寮式ニ見
エタリ上古鞆張ト云工人有テ鞆ヲ作リシガ
後代ハ其工人絶テナキニ依テ神宝ノ鞆ヲ木
ニテ形ヲ作リ黒ク塗テ銀泥ニテ紋ヲ画ク今
如此サテ其紋古今共ニ即チ鞆ノ形ヲ三ツ寄
セテ圓ク画也鞆ノ形ハ左図ノ如シ鞆ノ形
如此也此形ヲ似セテ如此シテ是ニテ三ツ
ヨセテ圓ク画ケバ三ツドモ卜ノ紋トナルナ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　　ガラス使用

リ鞆ノ繪ナルユヱトモヱト名付ル也右ニ云
如ク神宝ノ鞆ニ此繪ヲ画ク故俗ニ鞆繪ノ神
ノ紋ト云習ハセナルベシ然レ共伊勢神宮ニ
献ゼラルヽ神宝種ニアレ共外ノ神宝ニハ鞆
繪ヲ画ク事ナシサレバ武家ノ家ノ紋ト称ス
ル如ク鞆繪ノ神ノ紋ト云俗説也云ヽ又云巴
字訓俗ニ巴ノ字ヲトモヱト訓ヲ付タリ其故ヲ
知リタル人ナシ玉篇巴ノ字ノ注ニ布加切國名
又巴蛇呑象ニ算而後吐骨服之無心腹病トア
リトモヱト訓ベキノ義ナシ諸ノ字書皆同シ

巴ハ大蛇ノ名也其蛇ノ形ヲカタドリテ篆書
ニ巴ノ如ク書クヲ楷書ニハ巴ノ如ク書クナリ蜀
國ニハ此巴蛇アル故巴蜀ト号シテ巴ヲ國ノ
名ニモ用ル也サレバ巴字ヲトモヱト訓ベキ
ノ義ハ曽テナシ眞文按スルニ鞆繪ノ形◎
如ク此巴ノ字形相似タルガ故ニ其字形據テトモ
ヱト訓ヲ付タルナリ字ノ形ニ據テ訓ヲ付タ
ルハ巴字ヨリ外ニハナシ正訓ニハ非ス俗訓
也又水ノ◎如ク此廻ル形ヲ巴ノ文ト云ハ鞆繪ノ
紋ニ似タルトト云事ニハ非ズ巴ノ字ノ筆勢ニ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

似タルヲ云也紛レテ思ヒ誤ルコトナカレかし

○出雲風土記、秋鹿郡、恵曇郷の条ホ須佐能乎命御子盤坂日子命國巡行坐時至坐此處而詔此處者國稚美好有國形如畫鞆哉吾之宮者是處造事者詔故云恵伴（非亀之年改云々）内山真荒ヶ解ホ恵曇訓、エドモ倭名抄ホ信濃國安曇左阿都三と訓るごと此記も恵伴まる恵柁毛ノ社もるを倭て曇を柁毛と訓恵も畫の或ハ云ノ鞆ヨ畫をもるよりヲ名る歟ヲといへり應神記ニ云ノ上古俗号鞆、謂褒武多まる天皇の宗生脱ノ上ニ其形如鞆とをみて天皇の御名を品陀和気命とヤせバ以時ハ鞆ヨ褒武多ヲ警毛とカ云しあやまりある又も古事記、上の巻ホ伊都之竹鞆とカきて弓射とき左手ホ附射放バ弦當りて鳴のらん（ナリ）の一統ノ止をば止（トム）と書保武多（ホムタ）も保武（ホム）とも音よりヲ名（ナヅケ）て附（ツケ）声音をのミヲ名附ル例あまたし云々

○掬ホ畫を恵とヤるホを字の異音ニ祢代ホ就（ツク）る詞ありなど鞆の繪のるとせ

○谷川士清の日本紀通證四の巻（六丁ヨリ今按古事記ニ作竹鞆應神紀曰宍生腕上其形如鞆上古時俗號鞆謂保武多爲兵庫式曰熊革鞆料長九寸廣五寸牛革鞆手料長五寸廣二寸生絲縫鞆料鞆緒縈組長二尺五寸送官符曰御鞆口長四寸五分丸徑四寸厚二寸塗黒漆畫平文附村濃組有金銅金物一書曰今所献伊勢神財鞆其形如瓢黒漆以銀粉畫巴紋表裡各一也巳訓爲登毛恵江次第所謂鞆繪也出雲風土記如畫鞆是也

○後漢朗詠私註一の巻（八丁右ヨリ）三月三日の條に春之暮月月之三朝天酔于花桃李盛也我后一日之澤萬機之餘曲水雖遠遺塵雖絶書巳字而知地勢思魏文以觴風流蓋志之所之謹上少序（天暦時）

○（似酔序曰）三廻之水也曲水是也付峡水之形取郡號曰巳也巳字故文巳字也云々

○源起周年後幾霜（縈流送羽觴管筭茂）

按ずるに菅家の序ふ本朝文粋十の巻ふくろ

り

○本朝文粋八の巻ノ江匡衡三月三日陪左相府曲水宴同賦因流泛酒序ヲ酒徳頌之文因巳字而添風情者也云々

○古今著聞集十三の巻十二丁左ノ慈鎮和尚修学院ニ思ひ出もひて寄水懐舊ヲよみ給ける巳ヲ巳ノ字ノ義ヲ云々

○長明四季物語二月の条ヲ引てめぐり水のふなんめぐりきし巳ヲ巳ノ字ノ義ヲ云々

器もなくなく水もしたゝるなんめぐりきしはよの義

○太平記廿五の巻尾張小河東池曲ヲの条に大勢真中ニカケ入テ十文字巳ノ字ニカケ散シ云々

○明徳記中巻右ノ巳ノ字ニ廻り十字又ニ通り敵味方入乱ニ相州兵乱記三の巻義同討死の条ヲ十文字ニワリテ通り巳ノ字ニ廻ル云々ニ同巻府中軍の条ヲ十文字ニ割テ通り巳ノ字ニ廻ル云々ニ同四ノ巻河越夜軍の条

ゐ十文字ニカケ破リ巴ノ字ニ追廻シ云々
與清曰鞆繪ト云鞆ヲ画ル由名若ハ巴ノ
巴ノさま鞆ノ形ヲ似タル歟サハいへども或ハ二
巴三九巴右巴左巴ありとも二ツ
も三も九もありき右廻ル
名目ハ出雲土記ヲ畫鞆ト
らんおい古きおんとものさま
鞆ヲ似らんとたゞ鞆とのミいひつゞき
画鞆といへるもおぼつかなし
ゐ鞆ゐと三巴などのさま
画の音をりゐべくもあれど理のあいだか
ゐのく畫鞆は別義なるべし強ていそぐ繪と
假字まて須臾の略鞆を居置たる良をいへる
ゐや猶てい雑藝の初ゐ巴書たる筆柱軸とう
たひ江家次第ヲ今世の釘隠又うの物をさし
て鞆繪といへるなどおぼつかなし而已
宮の神宝の鞆ヲ巴ありてそを後の閤椎の
ともざまこゝを神社紋ヲ用ゐれ應神天皇の
神靈上の宮の鞆ヲ離さゞるべきを鞆を塵武
多とも止毛ともいへば八幡大神ヲ御紋ヲ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

り合せてその外の神あも移し用たるごし
大鼓お画るも神事お用るを楽器よりまた
あらん又物の廻りさまをもて巴の字といつまた
字躰よりいひ水のうづまくをも巴文といふも
こは新撰姓氏録摂津国皇別吉田連の条に任那
の三巴波の地といつるを蜀の三巴と同義と
も水の曲折三廻巴の字お似るを名な
るべし姓氏録古来流伝て上巴波氏あり百済
省古王の子孫なる汲の三巴波ともよみ弐
も汲の誤りて日本紀の継体紀七年の巴波とある
も巴に汲むべし続日本紀にも巴波とあるおれど波の形出るさまを
ける方鞆の形お形どりけるにぞ鞆繪お巴の字
を借用しるあるべしよりて鞆の形の波
文のの渦の形いづれも相鄰れるをもとよ
づく

第七眉間尺并一頭二頭三頭の紋

○巴の紋乃異名お一巴を一頭二巴を二頭三巴なぞいふ蘆名記等名家著る伊南二六
河原田治部少輔盛次著小山ノ未葉ナリ幕ノ
紋二ツ巴ともいふよし宝物集五の巻廿四丁左ヨ楚
王干将ト云鍛冶ニ剣ヲ作ラセ責給ヒテ干将ガ首ヲ

別ラレシカバ其子ノ眉間尺ト云シ者憤リ咎テ父ノ怨ヲ報ゼレトシケルニ干将ガ古ノ朋友ノ人憐テ共ニ謀テ吉ク汝其劒ノ頭ヲ三寸敢切口中ニ含デ死スベシ我汝ノ首ヲ持テ楚王ニ献セバ王心解テ汝ガ首ヲ見給フベシ其時口ニ含メル劒ノ頭ヲ楚王ニ吐懸テ共ニ怨ヲ謝スベシトゾ申ケル眉間尺是ヲ聞大ニ悦ビ劒ノ頭ヲ口ニ含テ自ラ己ガ首ヲ撥落シ朋友ノ前ニゾ置タリケレバ朋友其首ヲ楚王ニ献ケレバ王喜テ獄門ニ掛ラルヽニ三月マテ其首日ヲ怒シ歯ヲ食シバリ常ニ歯ガミヲ為ケル程ニ楚王恐テ鼎ニ入テ七日七夜煎ラル楚王鼎ノ蓋ヲ明サセ見給フニ彼含タル劒ノ頭ヲ撥ト吐懸ツレバ其劒アヤマタズ楚王ノ頭ノ骨ヲ切落シ鼎ノ中ニテ王ノ頭ト眉間尺ガ頭上ニ成下ニ成喰合ケルニ動モスレバ眉間尺ガ頭喰頁ヌベウ見ケレバ朋友自ラ己ガ首ヲ撥落シ鼎ノ中ニ入リ諸共ニ楚王ノ頭ヲ喰破テ眉間尺ガ頭ハ死ノ後父ノ怨ヲ報ズト呼ハリ朋友ノ首ハ泉下ニ朋友ノ恩ヲ謝スト悦

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　　ガラス使用

声ノ後共ニ奠燐ニケリ其三頭ノ鼎ノ中ニメ
巡ル様ヲ巳ニハ形トレルにヨリ申シ侍ルメリ云
ことあるおぼろげ〳〵ながら聞及ぶ
てうけが〳〵ながら聞及ぶの事ハ太平記十三の巻
干将鏌鋣の剣の事ハ昔周ノ末ノ代ニ楚王ト云ケル
王武ヲ以テ天下ヲ取ラン為ニ戦ヲ習シ剣ヲ
好ム事年久シ或時楚王ノ夫人鐵ノ柱ニ倚傍
テスベミ給ヒケルガ心地只ナラズ覺テ忽懐妊
シ給ヒケリ十月ヲ過テ後生産ノ席ニ苦テ一
ノ鐵丸ヲ産給フ楚王是ヲ怪シトト給ハズ如
何様是レ金鉄ノ精霊ナルベシトテ干将ト云
ケル鍛冶ヲ被召此ノ鐵ニテ宝剣ヲ作テ進スベ
キ由ヲ被仰干将此ノ鐵ヲ賜テ其妻ノ鏌鋣ト共
ニ呉山ノ中ニ行テ乾泉ノ水ニ淬ラ三年ガ内
ニ雌雄ノ二剣ヲ打出せり剣成テ未奏前ニ鏌鋣
干将ニ向ヲ云ケルハ此ノ二ノ剣精霊暗ニ通ジテ
坐ナガラ怨敵ヲ可滅剣也我今懐妊せり産子
ハ必猛ノ男メル男ナルベシ然レバ一ノ剣ヲ
ハ楚王ニ献ルトモ今一ノ剣ヲバ隠メ我ガ子
ニ可與給ト云ケレバ干将鏌鋣ガ申ニ付テ其ノ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　ガラス使用

雄劔一ツ楚王ニ献ジテ一ツ雌劔ヲバ未タ胎内ニアル子ノ為ニ深ク隠メゾ置ケル楚王雄劔ヲ開テ見給フニ誠ニ精霊有ト見エケレバ箱ノ中ニ収テ被置タル此劔箱ノ中ニメ常ニ悲涙ノ声アリ楚王怪テ群臣ニ其ノ故ヲ問給フニ臣皆申サク此劔必ズ雄ト雌ト二ツ可有其ノ雌雄一所ニ不在間是悲テ泣者也トゾ奏シケル楚王大ニ怒テ則チ将ヲ被召出典獄ノ官ニ仰テ首ヲ被刎ケリ其後鏌鋣子ヲ生リ面貌尋常ノ人ニ替テ長ノ高キ事一丈五尺力、五百人ガ力ヲ合セタリ面ニ三尺有テ眉間一尺有ケレバ世人其名ヲ眉間尺トゾ名付ケル年十五ニ成ケル時父ガ書置ケル詞ヲ見ルニ、日出ル北戸ニ南山ニ其松松生ズ於石ニ劔在其中ニト書リサテ此ノ劔北戸ノ柱ノ中ニ在ト心得テ柱ヲ破テ見ルニ果メ一ツノ雌劔アリ眉間尺是ヲ得テ哀楚王ヲ奉リ討父ノ仇ヲ報ゼバヤト思ヲ事骨髄ニ徹リ楚王モ眉間尺ガ憤ヲ聞給テ彼レ世ニアラン程ハ不心安被思ケレバ數萬ノ官軍ヲ差遣メ是ヲ被責ケル二眉間尺一人ガ勇力ニ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

被攉又其雌劍ノ刃ニ觸レテ死傷スル者幾千萬ト云數ヲ不知斯ル處ニ父干將カ古ヘノ知音ナリケル艾山人来テ眉間尺ニ向テ云ケルハ我レ汝ガ父干將ト交リ結ブ事年久カリキ然バ其用友ノ恩ヲ謝セン為汝ト共ニ楚王ヲ可奉討事ヲ可謀汝若父ノ仇ヲ報ゼントナラバ將所ノ劍ノ鉾ヲ三寸嚼切テ口ノ中ニ含テ可死我汝ガ頭ヲ取テ楚王ニ献セバ楚王悦デ必ズ汝ガ頭ヲ見給ハン時口ニ含メル劍ノサキヲ楚王ニ吹懸テ共ニ可死ト云ケレバ眉間尺大ニ悦テ則雌劍ノ鋒三寸嚼切テ口ノ内ニ含ミ自己ガ頭ヲカキ切テ客ノ前ニヅ指置ケル客眉間尺ガ首ヲ取テ則楚王ニ献ズ楚王是ヲ獄門ニ被懸タル間楚王是ヲ恐テ敢テ不近給是則ノ中ニ入レ七日七夜マデゾ被煮ケル餘ニツヨク被煮テ此頭少シ爛テ目ヲ塞ギタリケルヲ今ハ子細非ジトテ楚王自ラ蓋ヲ開セテ是ヲ見給ケル時此ノ頭口ニ含メル劍ノ鋒ヲ楚王ニハット奉ニ吹懸ケ劍ノ鋒不誤

楚王ノ頸ノ骨ヲ切ケレバ楚王ノ頭忽ニ落テ
鼎ノ中ヘ入ニケリ楚王ノ頭ト眉間尺ガ首ト
煎ル湯ノ中ニシテ上ニナリ下タニ成リ喫
相ケルガ動バ眉間尺ガ首ハ下ニ成テ喫貪又
ベク見ヘケル間客自己ガ首ヲ撥落テ鼎ノ中
ヘ投入則眉間尺ガ頭ト相共ニ楚王ノ頭ヲ喫
破テ眉間尺ガ頭ハ死テ後父ノ怨ヲ報ズルヌト
呼リ客ノ頭ハ泉下ニ冤友ノ恩ヲ謝ズルヌト悦
ブ声シテ共ニ皆煮爛レテ失ニケリ云ヒ此ノ
条參考本ノ如ク刪ら[illegible]ど譯語中ノ當時の
詞などあるて考證ス備ベきものにあらず
參考本ノ奉朝の事跡ハ詳ならず唐王天
竺なるの孕恵者のごくは信じもべきにあらず
なり三國傳記十一の卷第十七段眉間尺事干將莫
耶劍事の条ハ漢ノ高祖ノ時代ニ楚王ト云ケル王
武ヲ以テ天下ヲ收ト思フ志アリ依之戦士ヲ賞シ良劔
ヲ好事甚シ或時此楚王夫人鉄柱ニ寄添テ涼ケル
ガ心地タヾナラズ覺エテ忽懐妊有ケルカ十
月過テ後產生セシニ果一ノ鐵ノ丸ヲ產楚王是
ヲ怪シトセズ何樣金精靈ナルベシト云テ則

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

テ干将ト云ケル鍛治ヲ召シテ此ノ鉄ニテ宝剱ヲ作テ進スベキ由ヲ仰ラル干将此鉄ヲ給リテ其妻莫耶ト共ニ昊山ニ入テ瀧泉ノ水ノ汲ミ三年キタヘテ雌雄ノ剱ニツ打出セリ剱成テ味ヲ奏テ先ニ妻ノ莫耶夫ノ干将ニ向テ申ケルハ此ノ二剱ハ精霊暗ニ通ジテ怨敵ヲ可レ滅ス剱也今我懐妊セル所ノ子ハ産ル、時ヲ見ヨ必ズ猛勇ナル男子ナルベシ然バ一ノ剱ヲバ楚王ニ奉リ今一ノ剱ヲ隠テ我生ム子ニ與ヘ給ト申ケレバ干将莫耶ト申付テ其雄剱一楚王ニ献メ一ノ雌剱ヲバ未ダ胎内ニ有ル子ノ為ニ深ク隠シ置タリ楚王雄剱ヲ被テ見給ニ誠ニ精霊有ト見エケレバ匣ノ中ニ秘蔵セリ然ニ此剱匣中ニシテ恒ニ悲ミ泣ク声アリ怪テ群臣ニ其泣故ヲ問ニ臣皆申サク此剱必ズ雄雌二可レ有ル其雌雄一所ニ在ザル間是ニヨツテ啼物也トゾ奏シケル楚王聞レ之ヲ大ニ怒リ干将ヲ召出シ典獄ノ官ニ仰テ首ヲ刎ラレタリ其後莫耶子ヲ生タリ面貌尋常人ニ代テ長ケ高事一丈五尺力五百人ガ力有リ面三尺ナリ眉間一尺有リケル故ニ世人眉間尺トゾ名付ケル年十五ニ成ケ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　ガラス使用

ル時父ガ書ケル詞ノ見ニ日出北戸南山其松
ヲ生ニ於石一劔有二其中一ト書タリサテハ劔北戸ノ
柱ノ中ニ在ト心得テ柱ヲ破見ルニ果一ノ雌劔
ヲ得テ眉間尺之ヲ哀楚王奉レ討父ノ仇ヲ報ゼバ
ト思ヒ骨髄ニ通リケレバ時ニ楚王ヲゾ伺ケ
ル楚王モ又眉間尺ガ憤リヲ聞給テ彼レ世ニ有レ
程ハ安心有ジト思食ケレバ數万ノ官軍ヲ指
遣シ是ヲ責ラレケルニ眉間尺一人ガ勇力ニ
攻カレ此雌劔双ニ伏レテ死傷スル者幾千万
ト云數ヲ不レ知カ、ル處ニ父干将ガ古キ知音ナ

リケル劔客一人来テ眉間尺ニ向テ云ケルハ
我汝ガ父干将ト交ヲ結ブ事年久カリキ然ニ
其冏友ノ恩ヲ謝セン為ニ汝ト共ニ楚王ヲ可レ
奉レ討ニ亡事ヲ可レ謀ル汝若父ノ怨ヲ成レ報ント持所ノ劔ノ
サキヲ三寸クヒ切テ口中ニ含ミ死スベシ我
汝ガ頭ヲ取テ王ニ献ゼン王悦テ必ス汝ガ首ヲ
可レ見レ給時ニ口ニ含ミタル劔ノサキヲ楚王ニ
吹係ヨ死ヲ共ニスベシト申ケレバ眉間尺大ニ
悦テ即雌劔ノ崎ヲ三寸ケ切テ泪ヲ呑切テ口中ニ含ミ自
己ガ首ヲ掻落シテ客ノ前ニゾ指置ケル客眉

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　ガラス使用

間尺ガ首ヲ取テ則楚王ニ献ル王大ニ悦ヒ是ヲ獄
門ニ被懸タルニ三月迄其頭更ニ朽ハテレズ目ヲ
見張リ歯ヲ噛シバリ恒ニ歯ガミヲシケル間
楚王恐テ敢テ不近付其後是ヲ鼎ノ中ニ入テ
七日七夜マデ煎ラレケルニ餘ニツヨク煎ラレ
テ此首ホシヤスクテレテ目ヲ塞タリ今ハ子細有
ラジトテ楚王自鼎ノ蓋ヲ取セテ見之ヲ給ケル
時此首口ニ含タル劔ノ崎ヲ楚王ニハツト吹係奉ケル
其劔不知楚王ノ頸骨ヲ徹ケレバ楚王ノ首忽
ニ落テ鼎ノ中ニ入ニケリ楚王首ト眉間尺ガ首
トニヘカヘル湯ノ中ニテ上ニ成リ下ニ成リ
狼合ケル動スレバ眉間尺ガ首ハ下ニ成テ喰
頚スベク見エケル間客自己ガ首ヲ掻落シテ
鼎ノ中ニ投入テ眉間尺ガ首ト客ノ首ト諸共
ニ楚王ノ頭ヲ喰破テ眉間尺ハ死テ父ノ怨ヲ
報ジヌト呼バリ客ノ首ハ泉下ニ朋友ノ恩ヲ
謝シヌト悦ブ声ト共ニ二ヘタバレテ失ニケリ
此ノ口中ニ含ミタリシ三寸ノ劔ノサキハ燕ノ
國ニ留テ寶ト成テ太子丹ガ匕首ノ劔是也其
雌雄二劔ハ干将莫耶ガ劔トテ代ニ天子ノ重

室也ニガ陳ノ代ニ至テ俄ニ失タリシヲ張華雷
煥ト云ニ人ノ臣下星光ヲ以テ知之舊獄門邊
址五尺カ下ヨリ堀出テ雌雄ヲ得タリシガ張
華雷煥帶之延平津ト云澤ノ辺ヲ通リケル時
二ノ劔自水中ニ入テ雌雄二龍ト成テ碧浪ノ底
ニゾ沈ミケル云々祖庭事苑三の巻十四丁左
の条ノ楚王夫人嘗夏夜涼抱鐵柱感孕後産一
鐵楚王令干将鑄以為劔三年乃成雙劔一雌一
雄干将窃留雄ノ劔ヲ進雌ノ劔楚王王怒於匣中常聞悲
鳴王問群臣曰劔有雌雄鳴者憶雄耳王大怒即
収干将殺之干将知其應乃以劔藏屋柱中因嘱
妻莫耶曰日出北戸南山其松松生於石劔在其
中妻後生男眉間尺年十五問母曰父何在母乃
述前事久思惟剖柱得劔日夜欲報楚王王亦募
不見其人宣言有得眉間尺者厚賞之尺遂逃俄ニ
有客曰子得非眉間尺耶曰然客曰吾聶山人也
能為子報父讎尺曰父昔無辜被荼毒君今惠
忽何所須耶客曰當得子頭并子劔尺乃與劔并
頭客得之進楚王王大喜客曰願烹之王遂投於
鼎客俗於王曰其首不爛王方臨視客於後以劔

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

擬王頭隨鼎中於是二首相齧客恐尺不勝乃自刎以助之三頭相齧尋亦俱爛見孝子傳紿音待欺也云々同書五の巻四丁左三皇塚上の象を説者指眉間尺事欲以成前語即三皇之説未見所出當云楚王塚上草離離事見祖莫艷人云々碧巖集一百則祖庭事苑載孝子傳云楚王夫人當夏乘涼抱鐵柱感孕後産一鐵塊楚王令干將鑄為劒三年乃成雙劒一雌一雄干將密留雄以進雌於楚王王秋匣中常聞悲鳴王群臣問臣曰劒有雌雄鳴者憶雄耳王大怒即收干將教之干將知其應乃以劒藏屋柱中因嘱妻莫耶曰日出北戸南山其松松生於石劒在其中妻後生男名眉間赤年十五問母曰父何在母乃述前事久思惟剖柱得劒日夜欲為父報讎楚王亦募覓其人宣言有得眉間赤者厚賞之眉間赤遂逃俄有客曰子得非眉間赤邪曰然客曰吾艷山人也能為子報父讎赤曰父昔無辜枉被荼毒君今慧念何所須邪客曰當得子頭并劒赤乃與劒并頭客得之進於楚王王大喜客曰願煎油烹之王遂投於鼎中客詔於王曰其首不爛王方臨視客於後

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　ガラス使用

以劒擬王頭隨鳥中於是二首相囁容恐眉間赤
不勝乃自刎以助之三頭相囁尋亦俱爛云々な
どことごとし

第八多磨河

○多磨河 安閑紀に多氷屯倉又て多氷也即
多磨の通音之万葉集にも多麻ともかき又
名書にもたまバ正例ならしかがふし延喜式に多磨
とも多麻ともあまど此は續日本紀元明天皇
和銅六年五月甲子詔よ畿内七道諸國郡郷名
著好字延喜民部式に諸國郡内郡里等名並用二
二字必取嘉名なども定られしより後あまバ多麻と
あるかゝる字誤なるべし後名抄の國郡部に
民部省の帳などに据まゝて大婆とも訓注せるも
然なり多磨とも多麻とも大婆とも相通ひて
我まぜば多氷とも多麻とも大婆とも相通ひて
いふる中歟ま調を高て通音もまじきくば
式と後名抄も據て多磨と云き大婆と訓を改
とならべし日本霊異記以下諸抄書本多著
物語ふ多磨郡又は武蔵記録のおや和名書
鏡なも多磨河とあまバ多麻河とあるべく

や玉河と書ハ建保の比より渡光る麿くらを
りの詞を詠給ふ〳〵歌もよまるゝて神中掛ふ
ゑ其名ゝ就て兒玉郷ふおこりくるむよし況
せ〳〵之寛永沒後物徂しなりんとおぼ御申。徳
國風土記ゟ多麿ゑ玉まる多麿ともゝんそゝ
ゑで文禄以前の正き書ふ多麿とかゝるそ
なし仁安年中の証尚の証ふ多波郡日蓮注画
賛ふ田波河私書物ふ多波河神ふ鏡ふ舟波河
などあるも多麻とはいそゝ子證之ゑ迚ば多
麿河とゑゝ太婆我波と訓を〳〵とハいゝめそ

氷源甲斐國都留郡船越村ふおこり東隣北丹
波山村を経て丹波川と号し中川村鴨沢村
をすぐ以上の四箇村往古ハ武藏國多磨郡内
なりしを甲斐國ゑ隷かりくんとおもゝれ霊
異記今昔物語ゟ見えし多摩郡ノ鴨里ゑ今の
鴨沢をゝべけゑバ之ゑて多磨郡小河内境白
尾掛沢丹波村迄経多磨郡中迄流迄荘東郡羽
田の海ゟ初の其間上道四十里許之丹波村ゑ
大丹波ふ丹波と二ゟ多ゑ此處ゟ又ゑ丹波山村ゟ

丹波山大丹波の里の中ゟ
出ゟ川なれば多磨河と称
ゟ歌ゟ調ゟんため也通音もて多麻河
ゟよゝ遂ゟゝ珠玉の意ともとりなして詠出
ゟをゝいなゐるゝ郡ハ建長比ゟり文禄の比
までハ多磨河を堺て東を多東郡西を多西郡
とゝ其後古ゐ復して一郡ゟ今也ゐも多磨と
ハ書ゐゝゟゝゟゝゟゝ

○考證

日本紀安閑元年第ゟ武藏國造笠原直使
主與同族小杵相爭國造經年難決也小杵性阻
有逆心高無順密就我擬杉上毛野君小熊而謀
殺使主使主覺之走出詣京言狀朝廷臨斷以使
主為國造而誅小杵國造已謹為國家奉置横渟橘花多倉樔四處也倉云
〻

拾芥通證ゟ横渟ハ横ゟ是郡橘花ハ橘樹郡多
水ハ多磨郡倉樔ハ久良郡ゟゝゟゝゟ也倉
ハ粮倉の類ゟゝ新ゟ田也墾開ゟの賦稅
ゟ穀駄て出挙ゟゝ朝廷北御料ゟ奉ゟ之此ハ

抑ゝ考あきらむべきふようなきにあらだ
續日本後紀一の卷天長十年五月第十丁西武
藏國言管内瞻遠行路多難公私行旅飢病者衆
仍於二多磨入間兩部一置二悲田處一云々
按ずるに多磨流布、卯本ども多麻呂の三字と
ばかり又一古写本ども多麻の二字と
悲田院などもあなれど今世の施藥の類な
り

延喜式神名式上る東海道武藏國多磨郡八座
並小
云々同民部式上る東海道武藏國大國云々

多麻考

按ずるに八座並小社なきにはあらず大社なきにはあらず之
大中小社の差別は遠厥儀式に見えたれども
くわしく稽考ふるまでは大小大上中下國の
四等乃中の大國なるまでの古写本ども多磨とのみ仮
名類聚抄、也の卷國郡部も東海郡武藏國
府多磨郡云々多磨ハ波婆云々
按ずるに延喜式書ども大婆と
訓ふは通音ゝ万葉ども再通ゝ多麻と詠た

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　ガラス使用

多ハ歌ハ其調ヲ賞ヤなるべしさて多磨ハ
郡名なるど今甲斐都留郡ヨ隷たる丹波山
村又ハ多磨郡大丹波小丹波などより初こ
りて河名も名づくるに以呂波字類抄ニあの
巻ヨも多磨ともたり

万葉集十四の巻武蔵國歌ヨ多麻河泊余左良
須氐豆久利佐良佐良尓奈仁曽許能児乃已許
太可奈之伎 同九の巻豊嶋郡上丁椋橋部荒虫
之妻宇遅部黒女の歌ヨ麻河加波賀志刀里加氐加尓氐多麻乃余許夜麻加志由加

也良牟

抑も多麻ともよ兄ともを多麻の通音之倭名抄
ヨ相模國愛甲郡玉川郷あり又山城ヨ玉川
おとヽ帖ヨよ将津の玉川ハ井手の玉川ハ
始てうたゝ
ヽといふ〕西治百首建保百首拾玉集などの
比のうた
ヨよりより 迎江の玉川 秋物撰よ仲光の歌あり
陸奥の玉川 秋物撰よ俊恵の歌あり
集ヨよ
かり なども同名之歌の意也玉川ヲ
きよくすゞしくさらさらと布をさらすよ
しれ初ヨより更ヨ更りて殊ヨよ文

女児の頭お可憐ぞとよめるつくりは
白絲布と云て麻布之綾名抔お調庸布とは
別て如一延喜式お多く絲布と云ふ
お多之俗言お志きりとつゞしうな
しきかあやきと思ひ沢の谷は阿加胡麻お毒
駒之夜麻努ハ山野之渡賀志お殺ちと刀里
加尓呂ハ捕不得而之多麻乃余許山ハ多摩
那比横山之今ハ玉南お横山の名残とり
多摩川辺の山をいへり加志由加也良牟れ
歩徒の令行之知とあり志ハ通音まて天地お阿

米都之などいへり例の由ハ従の古
言也也良牟ハ馬お尋て捕お労より男をや
らんとよめる
吾妻鏡二の巻お武蔵國多摩郡の内吉富并一
宮蓮光寺など同卅四の巻ゟ以下武蔵野可被開
水田之由議定記就之可被懸上多摩川水之間
云〻ゟ篤胤太郎師政拝領武蔵國多摩野荒
野云〻
抑ゟ多磨野ハ多摩郡の誤なや此書中ゟ
多磨とも多麻とも多摩とも書なとなし

淀谷祥雲寺中景徳院所藏銅鉦筒銘ニ敬白ス僧智
賢南閻浮提日本國武藏國多波郡宮光寺矣大
施主上生成恒少施主藤原氏工藤原守道仁安
二年歳次丁亥二月廿一日庚寅

按ニ仁安六條院天皇ノ御世ノ若クシテ二
年ハ清盛任大政大臣ノ年ニシテ多波郡
ヲ多磨ト通音ナル字ナレバ然ルベ
シ

神明鏡下卷ノ近文三年九月十九日新田左兵
衛佐義興武州丹波河ノ船中ニテ自害ス云々

按ニ丹波ハ田波多波ナド通音ニ今多磨郡
丹波村アリテ大丹波小丹波ト別チテ云リ甲
斐都留郡モ丹波山村アリイヅレモ川辺
ノ里ナリ

日本靈異記中卷惡逆子愛妻將敎母謀現報被悪
死縁ヲ吉志火麻呂者武藏國多磨郡鴨里人ニ也
云々

按ニ群書類從本誤テ磨ヲ麻ニ作リ古寫本
假名本共ニ磨ニ作ル旧本今昔
物語母ノ卷吉志火磨擬敎母得現報語ニ武

藏國多磨郡鴨ノ郷とゝん云宝物集五之巻ニ
ハ我朝武藏國ニ玉ノ大丸ト云者アリトあり同說なれど多磨郡の事ニ大丸とゝ云ふ處のさとぞ鴨の里いと近ければ丹波山ヲや川鴨澤の四村ハ都筑郡の内の川とひの村ニさて武藏多磨郡ハ河内境氷川白尾梢澤小丹波と村つゞきニ丹波以下の四村往古ハ武藏なりしなるべし今甲斐國都留郡に鴨狄村ありとこなるべし

日蓮注画賛ニ入滅章ハ田波河迎池上村ニ掬ふ田波ハ多波多麿丹波と通音なり
拾芥抄中末巻諸國郡數部ニ武藏大遠廿四郡ニ多麻ニ
掬ふ節用集運歩色葉集なども多麻とあり
りて誤のまゝ我孔ニたり波ハ書ハ本一郡
を廿四郡といへるも宜しからず西郡の法の字ハ曾我物語三の巻ニも見ゆ
新撰鈔應永十三年六郷保業福寺勧進状ニ多
波河之流ニ同應永十九年ニ西郡小河郷ニ

宮社頭妙徳仰板額進献ス多波河之水鹿和光
月明ニ云ヘ

梅小松栗柳小武州多東郡深大寺ノ僧長栄
ノ文集ニテ永徳ノ永享ノ比迄ノ事ヲ
神中抄十二ノ巻ホ武蔵国ノ児玉ノ丸ヲ云ヘリ
多ヅキ云ヘリ。川ヲ玉川トハ云ヘ
梅小松ヲ小松ト云ヘル多摩ノ郡ヲ小多
摩トハ云ヘルヤウニ聞ユレドモ小松ト云ヘル
ホ之ヲ児玉川ヲ児玉ヨリ云ヘル
ニハ非ルベシ

日本徳國風土記ノ七十九ノ巻ノ武佐志郡ホ多摩
郡式ハ玉ヲ云ヘル多摩川ホ出テ諸鵐鶫鵠ホ里人作テ
調布納ル内藏寮ニ云ヘル多摩ノ大聖寺ノ
梅ホ徳國風土記ニ寛永ノ比迄ハ調布ヲ
ホ多摩川ニ晒シ調布ヲ手作布
ヲ云ヘリ調布ヲ手作布ヲ云ヘル事ハ
玉筒物ト異ナルベシ又多摩ヲ麿ト書ヲハ麿呂ノ
略ノ字ヲ書ヲ云ヘルヲ笑ヒタルヘシ
永禄二年北条方ノ北ノ多西ノ事ヲ
りてノ多摩川ノ事ホ西ヲ分ヲ西郡ヲモ云ヘリ
草村ノ松連寺ノ建長二年ノ銅経筒ノ銘ホ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

日幸武州多西吉富真慈寺と云へ行る至
始(ハジ)るよし多雲多東北多名ゑ知ぬが
建暦の比より氷採の始(ハジ)まりて今に至(イタ)るまで、炎暑西西
郡(コホリ)ならでハ氷(コホリ)ことを知(シ)らず
武蔵野地名考ハ玉河西の方甲信二州の山中
より武州多波山の麓谷を流れ来る水を集の方
橋樹郡鶴田の浦の方にて海へ落入元四拾餘
里矢口渡も其河の末(スヘ)之
捜(サガ)す武蔵野地名考ハ享保年中武蔵管(スガ)笠の
里人田沼溝次郎義章が撰之此説誤あり

武蔵渡ハ多摩郡より多摩川ハ當郡の真中を流
れ其川ゑより東郡ゑ境ゑて郡ゑ名ゑ出ゑ又郡ゑ
りて川の名ゑもそゝぐ所ゑいへる迄ゑて丹波
川郡内郡の北の方西越ゑ丹波村ゑ
山のふもとより出ゑ丹波村ゑ
法川ゑ云又甲州の内一の瀬里ゑはゑ川大善
木川小菅木川黒川小室川等乃川ゑ丹波川ゑ
落合武州多摩郡へ入り西川と唱へ
秋川あき川平井川乃名あり其流水を容ゑ池
上ゑ村の如ゑ是ゑ羽田村

て海へ入る凡そ四十里ぞうり北へ流る

とぞ云へ

按ずるに武蔵高麗川は入間川の支流にて高麗郡の諸水を合せ一名大和田川と云ひ阿座川を入れて多摩川の末流を合せ入間川と云ひ又阿左味川とも云ひ阿座川とも云ひ又阿左美川とも云ひ又阿佐美神社も今八王子の南方北野天神とてあり其の辺の字を阿左味と書きて其の流を阿左美川と呼ぶ

又按ずるに秩父川と別に

関東水源考に荒川は甲斐國多波ちいふ水源より流出て甲斐國を過ぎ武蔵國に入りふかえより山川一筋流出て國中を過ぎ武蔵國日原(ニッパラ)と云ふ所にて小川落合ひ荒川と呼ぶ武蔵國秩父郡大内村より凡そ四十里ばかりを流れて海へ入る

按ずるに荒川の源考に岸義十郎を撰ぜり此説もっともあやまれるものにはあらず

武蔵名所考三の巻に甲斐國

参河丹波山を発して名を沖多郡
名に負亘帯せる水もとつき水名ハ滝鶴の
山山勢なるべし美濃集の多麻延喜式も
多麻和名抄ハ多麿の作さで考ふる事を
填せ玉ふまでもなし丹波もまた波
ふる意歟假字の異なるを筆ぞべう
らでさ川の源流ハ被郡丹波山村の山中よ
り出る北岸流ハ同郡舟越村の山中より出
る二流ハ合し丹波山村高屋村の西を過ぎ高
屋村活瀬村の西にて高屋村小菅村乃東よ
りおる小菅川と云一流ハ又合し鴨沼村乃上
にて屋敷川の東より出る屋敷川と云一
流ハ合し又鴨沼村より出る一流ハ小菅村井狩村の
西より流る此川の上流ハ白沢村の上流ハ井狩村飯尾村の西より出る
一流ハ合ふ武花ハ入りて小河内村の東にて
おちうかゞれ出る峯川と云一流ハ小河内村より出る水根沢川と云一流
中山村西にて北へ流れ出る北乃方秩父郡より
も合しまゝ氷川村にて又棚沢と
ゐづる日原川と云一流ハ又棚沢
と小丹波村の西にて小菅村より出る

る一流を合し又丹村能寺村の界より
南の方柳嶽山より出る一流と合し又川井村
深井村の界にて北北東方大丹波村より出る大
丹波川と云一流と合し又深井村と又屋村乃
界にて山の方より流来る。平藻川と合しそ
さより青梅村の南を流れ羽村より東南草花
村二宮村北界にて西の方平井村の界より出
る一流大久野川と云ふ小合し法用高月二村より
界にて秋川と合し（秋川だ原を詳にそだ南の一流わう川
ぶさとふるふ
なり）又東南の方より合流する事数里谷田村と

一宮村より北界にて大和田川と云ふ小合しの出流あり
（此川の一流は深大寺村より出
八駒木野小仏より流来せだ南の一流
南を巡りそれより数里北界にて南北より合流する
細流あり。南より多摩郡中嶋村と橋樹郡登戸
村の界にて三沢川と云ふ小合し（三沢川の源は武蔵国
かく汚水の合流する事なれば大河のごとなりても
さらなり今郡下木利乃沢とありて
作くその徳此より下南の北方稲荷の新田おいてより
数里ばかりくしく橋樹郡に属し北の方

八方を多摩郡の属なれば北方ハ
下野毛村より羽田村あたりまでこれ
ハ多摩郡乃名所川よりおこりしもまた
ひや

梅が枝名所四巻杉平維茂妻人形
冠山等乃攻込也これ甲斐国都留
なるべきをまたり
当郡の誤ならん
丹波山より溜鶏をさぐ
丹波川よりのよりの
多摩郡丹波村とつづまるなおこれをも決ず

一又都筑郡の恩川を二俣川をもとめ
二俣村を多摩郡高知野の南よりそこを
程久保村より初る川あれどもこれ又栗川
ともに大栗川をいへる
さ有山村(アリヤマ)よりそこを一流西木村より出
ちそこを古歌も名とも棟雲集を挙(アゲ)たりさて
玉川の事ハ国華全葉記後漢三方図舎東海
乃名所記東海紀行紀勢西行紀事秋葉道
の叢和歌名所山水日記武野紹巴
ひ記玉川砂利武蔵野名所名産なども其所

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

ゐ遠あけゞバゝもゝしつ
這多磨河考證一卷文政十三年四月廿八日
起稿翌廿九日閣筆卒尓之梅子誤謬定多仕
日得閑暇將訂正爲
筭九冬議公辨
○拾芥抄中本官位相當部ニ如參議造寺長官防
鴨河使者家初書之後書位也今按關白別當藏
人等書諸官位之家初欵立蔭次第造寺官位尊
將軍藏人冬議等先ッ名論ゞ官位高下最上。必書之
今歸捧物也云ニ

○有識問答の二の卷ナヽ左ゟ征夷大將軍正二位イノ
姓事此等ハ位の上下をいそび征夷將軍と位
の上ゟ書之鎮守府同前かゝるべし縱バ後職也
云ニ是又如何答ゟ是サハゲモノトテ假令バ
○造東大寺長官修理左宮城使防鴨河使ナドモ
同ジサシアゲテ諸官位ノ上ニ書官ノ類也云
ニ

○官職難義官位相當の事ゟ武官ゟ
あれどゟ兵ノ捧物トテ等ト書ゟれ前の
さぐゟれ及ハぬこゝゟ捧物ゟ等ノ一のゝ

らむ也摂政関白参議将軍蔵人薬院使検
非違使随身長官宮城使などそれ〳〵の捧物のう
ちより参議と打事とは将軍家を早く宣之
假令ば征夷大将軍参議従四位下守左近衛権
中将當時武家の任署此分也と〻

○職原抄按附位署式必在位事参議別當蔵人頭蔵人佐ノ人他理宮城使判官典侍造寺長
官同上征夷大将軍施薬院使内舎人外國前司未公
文受之云〻

○扨も令義解序よ参議従四位下行刑部郎中兼侍
従臣淡海朝臣真人等奉勅撰と有大納言正
三位兼中務卿一品舎人親王監修と有
大夫兼伊勢守藤原朝臣真勝参議左衛門督
従四位下兼守右大弁行近江守良岑朝臣安
世等奉勅撰と有大納言正三位兼行民部卿
朝臣吉野参議従四位上刑部小野朝臣岑守
参議民部卿正四位下勲六等臣朝野宿祢鹿
取等の類参議も皆捧物ありて右近大将
より上おのく〳〵出なから皆朝廷に奉る

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

時の位署書式之事和歌の撰集も参議等
なとゝもる事も奏覧を経るの申処の書法もの
の書も参議と書るも其人の対しくいふ語
もあとゝ後世も傳んがための書法なるべき
れば例しく称の書法も引證をべくもあ
らむ

○寛正布職原抄参議条の首書に書此官則参議
書之呼其人則曰宰相殿之有八人而称則加氏
呼源宰相藤宰相之云々
職原抄首書一の巻十四丁右 参議条の書に位署暗参議と
也呼名時宰相也書時或源参議菅参議呼名之
時藤宰相平宰相也人多故以氏別ツ
掛る位署か参議と書るか源宰相菅宰
相句とこゝいへ源参議菅参議なとゝ
例なきうへ此説之謬記之

○江家次第叙位篇二の巻十九丁左
参議一人〻尋〻在〻坐〻者〻可〻召〻之〻其〻詞〻云〻右近中将藤
原朝臣〻呉〻也〻音〻被〻召〻者〻称〻唯〻参進〻右廻〻経〻其〻後〻
長押上〻云〻

○玉海仁安二年七月一日甲子の条に又召参議詞一度召兼國一

度ニ召ス參議姓朝臣ト云ヒ四位參議可召名也而召ス官ヲ云ヒ但可尋問也云ヒ

抑ヶ陳ル召名時ノ例ヲ宣ヒ宣詞アレバ參議ト呼ヘカラスト云ヒ

○職原抄參議条ニ四位ノ人任ズルハ公卿ヌレバ姓朝臣ト也云ヒ聞書ニ四位ニテ參議ニ任ズルハ某朝臣ト天上人ノ時ノ如ク物ニモカキ名ニモ呼也三位已上ノ人任ズルハ公卿ヌル間參議藤原朝臣ナト呼ビ物ニモ某卿トカク也云ヒ寛正本ノ首書ニ四位藤原定家朝臣ト書ル之ヲ是姓朝臣之云ヒ

按ヶ某朝臣トハ藤原定家朝臣カト書ヲヨシテ某トハ名乗ヲ指詞アリ姓朝臣トハ藤原ノ朝臣アルヲ書ヲヨクヨク諱ヲ稽ヘ氏尸ヲ称ヲヨクヨクヨク

お對く參議と呼ハ一人の御詞宣詔の類ゟ限
るゟうゟ高位高官ゟ人ゟゟ丞相と呼
ある例えゟゟ下さゟの者ゟ宰相殿宰相
殿様ゟゟハさゟゟ相公ゟも八座ゟもゟへ
ゟゟさゟゟ迄き此漢学ゟ文章ゟ參議公
と書ゟゟ何の考据ゟゟゟゟゟゟゟゟ參議ハ
三公の列ゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟ
ゟゟゟゟ

又小添公為公平公をとびこえ
いつのまにかたかうへあらん迎年平俗の称ふ
一種の公あり己より劣さの人を指て貴公
とよぶ呼ふ者快しとせざれ或機まゝが異成
お對して貴公といつても足ず友男いつくはう文手
も我こそ貴公あらば大貴公ぞと罵いつる世話
あり又三助を三公八助を八公あといふ類も
あめそれ物騒といつる鄙俚の和句なれ
ぞと云て厄吹こぼすせるとよ己たりき若先
等の意も通ふ公字なれ参議乃顕官ゐ書つゞ

けたらんまゝいとく嘲時無礼の罪さり和
あるまじく仲尼も死也正名手といをしよ
しき侍ふその流を汲らん人こゝろく名
をみくさ孫このひありとも
世なをさ孫このひありとも
をあきあき名をぞすく

右参議考辨依
水戸侍臣藤田虎之助一寒尓所記也

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

835
74

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用